

に戦車やミサイルを打つのではなく、花火にしてくれればいいのにな
と思いました。

最後におじいちゃんは、

「絶対に戦争はするなよ。」

と泣きながら言っていました。ぼくはこの木ぼりの楽器のおき物を見
るたびに戦争のない世界にしたいと思うのです。

なくならないもの

原東小学校 六年

井 本 愛 羅

私の生きる世界には、一つ、なくならないものがあります。それは
戦争です。

一言で言って、私は戦争が嫌いです。戦争は、多くのぎせい者を出
します。

でも、戦争はいつ起こるか分かりません。いつ、どの国が、どの
国を攻撃するかわからないのです。でも、戦争を望む人はいないと私
は思います。ひとたび戦争になればたくさんのぎせい者を出すからで
す。

なのに世界のどこかですでに戦争は続いています。私はいつも、
なぜ戦争が起きるか疑問に思います。誰も望まないのに、なぜ戦争を

する必要があるのでしょうか。戦争が起これば、ただ悲しむ人が増え
るだけです。どこかの国の政治家が言うような「平和のための戦争」
など、私は考えられません。

私は、誰かが何も考えずに戦争を起こしているのだとしたら、絶対
に許しません。たくさんの死者を出して、たくさんのけが人を出して、
たくさんの人を悲しませるなんて、私は許しません。

とにかく私は戦争が嫌いです。もう二度と起こってほしくありません。
でも、少しの人達がそう思っていないと、世界は変わりません。世界中
の人が、戦争の恐ろしさを知るべきだと思います。そして、みんなで
うったえれば色々な国のリーダーに届くと思います。

そうやって、みんなが力を合わせることができれば、戦争のない、
平和な世界を作れると思います。

千体の人形

第一中学校 一年

鈴 木 伶 果

朝、目覚まし時計の音で目が覚める、何も考えずにベットを降りる、
当たり前のように朝食をとり、家族と話す、私はこのことが日常であ
り、幸せであり、平和だと思っています。

平和の対義語の一つといえば戦争、今日は原爆投下から八十年の「原

爆の日」でした。

私はこのことについて家族に話をしようと思いました。しかし、いざ考えてみると、私は戦争について具体的にはなにも知らなかったのです。そのことを家族に話すと、

「じゃあ、大船観音寺に行ってみよう。」
となりました。

そして戦争や原爆について知る、感じる、という、貴重な体験を、することができました。

そして、大船観音寺に着きました。そこには、高さ二十五メートルをこえる大船観音がありました。雲一つない青空を後ろにたたずむ姿は、とても美しくやわらかい表情をしていて、まるで私達を優しく迎え入れてくれていたようでした。外から大きな大船観音をながめてから胎内に入ってみました。

観音様の中に入ってみると、外の日差しが強さがうそのように暗く、近くで鳴いていたセミも、木の葉のかすれる音も消え、目の前には、千をこえる小さな木の人形がずらりと並んでいました。少しこわいなという気持ちを持ちながら、人形をよく見てみると、顔や体の形、大きさがそれぞれ違い、一体一体の表情や、木目から優しさと悲しみ、そして辛さが感じられ、何とも言えない複雑な気持ちになりました。

この人達は、ただ亡くなったのではなく、空襲や原爆、それがなければ、まだ生きることのできた命だったのです。そのような人々の命をうばったものに、いかりと悲しみを覚えました。千をこえる人形は、子供や学生で兵隊となった私と同じ年代の人のものもありました。彼

らは、どんな夢や希望を持っていたのか、そして命をうばわれるしゅん間に何を感じて、何を思っていたのか。そんなことを考えながら、もし今の自分がその時代に生きていたらと想像すると、悔しい、悲しい感情で、胸がいっぱいになりました。そんな気持ちのまま外へ出ると、目の前には、大船のまちが広がっていました。私は高台から見たまちの景色が、いつまでも、いつまでも、続いてほしいと思いました。

千体の人形を通して見えてきた「平和」の本当の意味、それはただ戦争がない状態ではなく、一人ひとりの命や日常が、守られること、それを当たり前と気にすることなく生活できることなのかもしれないです。しかし、それを当たり前のことと思わずに、過去の悲劇を忘れずに、身近な人を大切にすることなど、小さな平和を見つけていくことが大事だと感じました。

翌朝、目覚まし時計のアラームをとめ、ゆっくりベットを降り、家族に

「おはよう。」

と、いつものように言いました。でも昨日までのおはようとはちょっと違った気がしました。

千体の人形を思いながら、今日も小さな平和をつないでいきます。

伝え続ける「平和」

第一中学校 二年

勸山 檀

皆さんは、一九四五年八月六日、同じく一九四五年八月九日という日付を知っていますか？これは、広島と長崎に原子爆弾が投下された日付です。

一九四五年八月六日、午前八時十五分。

「突然閃光が走り、爆風と熱線、放射線によりたった一瞬で広島街は破壊された。炎が広がり焼き尽くされた広島街の街に、黒い雨が降った。これにより、一九四五年末までに約十四万人が犠牲となった。」この状況を、あなたは想像することができませんか？少なくとも私は当時の人の辛い思いを感じることはできません。多分、私がどれだけ辛い思いをしても、その辛さは当時の人とは比べようがないと思います。ですが、たとえそれが分からなくても、私はこの戦争の悲劇をもっと知って、後世に伝え続けねばならないと強く思いました。

私は、長崎に原爆が投下されてから六十六年経った日に広島で生まれました。私の曾祖父は戦争に兵隊として出征したそうです。また、親に連れられて、広島平和記念資料館やひめゆりの塔などの戦争関連の場所に行くことも多くありました。私は、戦争の恐ろしさを伝える展示物を見ると、想像が膨らみ、気持ちが悪くなってしまい、そういつ

た場所に連れていかれるのは本当に嫌でした。ですが今では、私がいくら嫌でも気持ち悪くてもそれは人生のどこかで必ず学ばなければいけないことなんだと思うようになりました。

そしてこの戦争の惨事を伝え続けるにあたり、大きな課題があることが分かりました。それは、「今の若者は、戦争への関心が少ない」ということです。私も最初は嫌々連れられていたように、戦争について学ぶことが面倒くさいことと捉える人が多いと考えます。

私の曾祖父は戦争に行きましたが、奇跡的に生還しました。ですが、戦争から帰ってきた曾祖父は、行く前と人が変わっていたのです。曾祖父は、人を殺めてしまった、多くの仲間が戦死する中で、自分だけが助かってしまった、という罪悪感に苦しめられていたのではないのでしょうか。戦争が終わっても尚、苦しむ人がいるということだと思います。それは勝利側のアメリカ軍人も同じだと思います。そして、帰ってきた曾祖父は、自分から戦争の話をすることはなかったそうです。私が嫌がり、目を背けたくなるような想像の中で、曾祖父は生き延び、その記憶に日々苦しんできたのかもしれないかもしれません。それくらい、戦争というのは思い起こしたくないことだったのでしょう。語り部の方も、大切な家族や友人を失ったことを話すのは、とても辛いことなんだと思います。戦後八十年。そんな貴重な話を聞けるのも残り僅かな時間となっています。この機会に、戦争について学び、多くの人に戦争のことを知ってほしいと思います。

「安らかに眠って下さい。過ちは繰り返しませぬから」
これは、平和記念碑に刻まれた、原爆犠牲者の冥福を祈り、戦争とい

う過ちを二度と繰り返さないことを誓う文です。これは、他人事ではなく、私たちが責任を持って守っていかねばいけないことです。被爆者の方々の話を聞くことができるのは今だけです。私たちは実現しなければならぬのです。永遠に平和な世界が続くことを・・・。

戦後のその先も

第二中学校 二年

山本 志穂美

みなさん今年は戦後何年目か知っていますか？今年には戦後八十年目です。八十年前のことは私には想像できないし、正直関係ないと思っていました。私の曾祖母は今、九十九歳です。今から八十年前その曾祖母は十九歳でした。日本が平和なことは当たり前だと思っています。だが、世界では今もまだ戦争で大変な思いをしている国もあります。曾祖母が戦争を経験しているとも知り、改めて戦争について考えてみると、私自身にも関係ない話ではないと感じました。

最近私はある映画をみました。現代の高校生が戦時中へタイムスリップした話です。戦争中の食べ物少なさ、いつ爆弾が落とされるかわからない怖さ、爆弾から逃げる大変さ、映画をみてそんなことを感じました。今と比べて食べるものも少なく、満足には食べられず、食事は芋類中心の生活でした。お風呂も制限されていました。石けんが使

えなかったり、お湯を沸かすことさえできなかったりしたため、お風呂に入ることもできない状態でした。いつ落とされるかわからない爆弾におびえながら、毎日生活をしていました。男の人は兵隊として、大切な人たちと二度と会えなくなるかもしれないという不安気持ちを抱えて戦いに行きました。もし、大切な人が亡くなってしまったとしても、残された人は生きていかなければならなかったなんて、私は耐えられないと思いました。映画をみただけでも、国のために様々なことを犠牲にして戦いに行かなければならなかったり、食べ物が少ない苦しさを感じました。私がこのように感じるということとは、実際に経験した人はもっと苦しくて辛かったと思います。信じられないけれど実際にあったことです。

また、大変なことは戦争だけではなく、終戦後も続いたそうです。なんの罪もない日本人が、罪を向けられシベリア抑留をされました。シベリア抑留とは、日本の兵や民間人が、外国の軍によってシベリアの収容所に捕らえられ、強制的に労働させられたことです。シベリアの冬は、氷点下三十度を下回る気温にもなる極寒の世界です。氷点下三十度は、まつ毛が凍ってしまい、シャボン玉も一瞬で凍ってしまような寒さです。そんな環境の中で日本人たちは森林の伐採をさせられたり、鉱物の採掘など重労働をさせられたりしていました。食べ物は黒パンやスープが配られたそうですが、十分な量は配られず、わずかな量だったので、同じ収容所の仲間と分け合っていたそうです。極寒の中働かされて、食べ物も十分に食べられない生活は、想像しただけでも辛くなりましたが、実際はもっと辛かったと思いました。そ

んな生活を送っていたので栄養失調になった人もいて、飢えや寒さに耐えられず一年程で亡くなってしまった方も少なくなかったそうです。衛生環境も悪かったので、病気にかかってしまい亡くなってしまった方もいました。収容所の人たちは、急にシベリアに連れ去られ家族や大切な人にも会えないので、手紙でやりとりをしていたそうですが、検査に通らないと送らせてもらえず、なかなか手紙でのやりとりもできませんでした。強制的に労働させられて寒い中、食料も衣類もほとんどなく、いつ帰れるか分からない生活は戦後から約十一年続きました。一九四五年に終戦し、一九五六年にまでシベリア抑留は続きました。戦争のその後のことにも目を向けてみると、終戦しても落ち着いた生活がしばらくできなかったことが分かりました。

戦争もシベリア抑留も私には考えられないほどの辛さ、苦しさだったと思うので、誰もが知ってこれからも伝えていき、もう二度とこんなことが起こらない世界にしたいです。今の生活は本当にありがたくて平和で、すてきな生活だと思いました。私は、この気持ちを大切にしていきたいです。

私にできること

第三中学校 二年

秋山 絢理

なぜだろう

同じ空の下　なぜこんなにも

違う毎日がそこにあるのだろう

私たちが笑い合っているとき

テレビの向こうでは

子どもたちが泣いている

映像に映る光景に　心が重く沈んだ

「平和」とは何だろう

誰かの優しさ？

それとも　争いが無い静けさのこと？

なにもしていないのに

悪いこともしていないのに

どうして

悲しいことが起こってしまうのだろう

私にできることは 何だろうか
何かあるはずだ

画面越しに見える涙を

拭うことはできないけれど

今そばにいる人を大切にすることなら
できるかもしれない

優しさは きつと広がっていく

一人ひとりが意識すれば

やがてみんなにつながり

それがやがて

大きな平和へとつながっていく

どうか

世界中の人々全員が笑い合える

そんな世界が

一日でも早く訪れますように

平和を願って

第三中学校 二年

後 藤 里李亜

今年九十三歳になる私の祖母は、とても優しい人です。私は祖母の思い出話から多くのことを学んで育ちましたが、中でも、祖母が語ってくれた戦争の話は、私の記憶に深く刻まれています。

祖母は五人兄弟の長女として、幼い弟たちの面倒を見たり、家事を手伝ったりしていたそうです。祖母の話の中で一番衝撃的だったのは、食事がほとんど「芋」でできていたという事実でした。朝はさつまいもを茹でたもの、昼には芋を甘く煮詰めたもの、夜は芋ご飯……。どの料理にも芋が使われており、それが当時の日常だったことが分かります。毎日芋ばかりで飽きなかったのだろうかと祖母に尋ねると、「当時は何かを食べられるだけで幸せだったんだよ」と教えてくれました。その言葉を聞き、毎日ご飯を食べられることが、いかに恵まれたことであるかを改めて実感しました。

他にも、登校中にサイレンが鳴り、近くの防空壕くうごうに潜ったという話もしてくれました。戦争を知らない私にも、当時の状況が伝わるように、その残酷な体験を具体的に語ってくれたのです。仲の良かった友人と一緒に逃げていた祖母が、ふと後ろを振り返ると、そこには荒れ果てた光景が広がっていたそうです。友人は遅れをとってしまい、亡

くなってしまうと聞き、深く考えさせられました。常に死と隣り合わせの生活を送る中で、仲の良い友人の死という現実を、私だったら受け止められるでしょうか。きっと立ち直ることはできないでしょう。毎日当たり前のように会っていた友人が突然亡くなるなんて、想像するだけで悔しくてたまりません。ご両親のことを思うと、胸が張り裂けそうなほど悲しい気持ちになります。その後、祖母は学校を卒業し、結婚したそうです。祖母の話聞いて、毎日ご飯を食べられることや、生きていられることが決して当たり前ではないと痛感しました。だからこそ、ご飯を残さずに食べ、一日一日を大切に丁寧に生きていきたいと強く思いました。

「平和」という言葉を考えると、世界各地で今も続く戦争と深く関係していると感じます。テレビでは、ウクライナの戦争や荒れた土地での環境問題など、目を覆いたくなるような光景が頻繁に映し出されています。先日テレビで見たのは、涙ながらに語る母親の姿でした。「子どもに悲しい思いをさせたくない、でも戦争はどうにもならない」と話していて、私はこの問題をなんとかできないものかと心を痛めました。

祖母の戦争体験や、今なお続く世界各地の戦争から、私はコミュニケーションのあり方を深く考えるようになりました。戦争の悲劇を繰り返さないためには、感情的にならず、冷静に相手の意見を聞き入れ、自分の意見も伝えるという対話が何よりも大切だと思います。これは、国と国との関係だけでなく、私たちの日々の生活の中でも同じことが言えるのではないでしょうか。身近な対立や意見の食い違いも、感情

に任せてしまうと、最終的に大きな溝を生んでしまう可能性があります。

話し合うときは感情的にならずに、相手の意見を尊重し、自分の意見もきちんと伝えられる関係を築いていくことが、平和な社会への第一歩だと信じています。コミュニケーションは日常で頻繁に行うもので、これを機に、より意識して実践していこうと思います。

沼津大空襲について

第三中学校 三年

木所 新

私は身近な戦争について調べてみたいと思い、まず父に話を聞いてみました。すると、父は「沼津大空襲」について色々と教えてくれました。興味が湧いたので、自分でもさらに詳しく調べてみることにしました。

まず、沼津大空襲は一九四五年七月一七日に発生し、二百七十四人の死者を出しました。落とされた爆弾はすべて焼夷弾だったそうです。この空襲の跡は、沼津市を見下ろす香貫山にも残っており、中腹の公園にある「慰霊平和塔」には、戦没者の位牌はいが祀まつられています。沼津が空襲された理由としては、軍需工場の存在が挙げられますが、米軍の報告書を見る限り積極的な攻撃理由はなかったようです。この

理由が気になり、父に意見を聞いてみると、「おそらく富士山を目印に基地まで帰るため、できるだけ燃料を軽くして帰るのにちょうど良かったのではないか」と言っていました。私は「なるほど」と思いました。確かに、自分たちの基地に帰るには機体を軽くした方が楽になり、空襲することが自国の力の証明にもつながるのでしょう。

さらに詳しく父に話を聞くと、私の曾祖父が学生るときにこの沼津大空襲を経験したことが分かりました。その中でも衝撃を受けたのは、曾祖父は、沼津を流れる狩野川のほとりの土手に多くの死体が埋まっております、それを学校側の指示で「掘り起こした」というのです。この話を聞いたとき、私は言葉を失いました。調べたところ、その話は本当だと言わざるを得ないような資料ばかりでした。

私が調べた情報を総合的にまとめると「多くの死者が出たため、火葬やきちんとした埋葬が間に合わず、仮埋葬や集団埋葬が行われた」と推測できます。今では考えられませんが、それが当時の埋葬の現実だったのでしょう。狩野川は、川沿いや河川敷が空き地として使われることも多く、一時的な埋葬地として選ばれた可能性があるそうです。

戦後すぐ、きちんとした供養や再埋葬のために遺体を掘り起こす作業が行われた地域もあり、学生や市民が動員されることもあったそうです。ただ、具体的なことは記録されていないものが多く、「遺体を学生や市民が掘り起こした」という事実が資料が少なくとされています。だからこそ、曾祖父は「この事実を消してはならない」と、父に伝えただのだと思います。公的な資料や記録に残っていないからこそ、「個人の証言」が重要になるのだと改めて考えました。

曾祖父は兵役のため戦争に行ったといえます。私が「無事に生きて帰ってこれたの？」と聞くと、父は「無事には帰ってきたが、指の爪のところが変形していた」と答えました。加えて「弾丸が指をかすめた」と教えてくれました。想像しにくいですが、指をかすめただけで形が変形するほど、武器というものは恐ろしいと知りました。曾祖父はすでに他界していますが、父に話を聞く限り、戦争のことは全く教えてくれなかったといえます。曾祖父はもう戦争が起らないことを祈り、戦争のことを知る必要はないと、優しさから教えてくれなかったのでしょうか。

曾祖父が指に残した傷跡と、父が語ってくれた戦争の記憶。それは、公的な記録には残らない、個人の苦しみと痛みの証言です。私たちは戦争を遠い過去の出来事として扱いがちですが、身近な家族の体験を通して、それが決して遠いものではないと痛感しました。平和は、誰かが与えてくれるものではなく、一人ひとりの記憶と決意によって守り続けるべきものだと学びました。曾祖父が戦争のことをほとんど語らなかつたのは、その恐ろしさを知る必要がない未来を願っていたからかもしれません。その優しさのバトンを、今度は私たちが受け継ぐ番です。曾祖父の言葉と記憶を風化させず、次の世代に伝えていくこと。そして、国や立場の違いを超え、他者の痛み想像力を働かせることが、平和な未来を築くための第一歩だと信じています。

一つの建物が教えてくれたこと

第三中学校 三年

眞野 響

「戦争って本当にあることなの？」と、昔の私は思っていました。教科書で目にしても、どこか遠い世界の出来事のように感じられ、現実味がありませんでした。

しかし、夏休み中に広島を訪れ、原爆ドームを目の前にしたとき、私の心の中で何かが大きく変わりました。夏の青空の下に静かにそびえ立つ原爆ドームは、想像していたよりも大きく、そしてあちこちが崩れ落ちていて、まるで「ここでたくさんさんの命が消えた」と静かに語りかけてくるようでした。その場所には多くの観光客がいましたが、誰もが静かに、ただその建物を見つめていました。私もその中の一人として、言葉を失い、じっと立ち止まっていました。

資料館の中に入ると、空気が一変したことを感じました。冷たい空気と静寂の中で、私は一つひとつの展示をじっくりと見ていきました。焼け焦げた制服、爆発の瞬間に止まった時計、無言の手紙、熱で溶けたガラス瓶。中でも最も印象に残ったのは、被爆した子どもたちの話でした。自分と同じくらいの年齢の子どもたちが、熱線と爆風で大火傷を負い、苦しみながら亡くなっていったという事実。その話は、私の胸を強く締め付けました。「なぜこんなことが起きたのだろう」「もし

も自分がそこにいたらどうしていただろう」そんなことを考えずにはいられませんでした。

戦争とは、ただ爆弾が落ちることだけではありません。そこに生きていた人々の命や未来、大切な人との時間までも奪い去ってしまうものなのだ、平和記念資料館で私は「知識」としてではなく、「実感」として学びました。戦争は二度としてはならない。それは言葉だけではない、心からの確信となりました。

では、戦争をしないために何ができるのだろうか？そう考えた時、まず身近なものを大切にすることではないか、という答えにたどり着きました。家族と真剣に話し合うこと。友達とぶつかっても、話し合っ

て仲直りすること。たとえ意見が違って、相手の考えを受け入れて耳を傾けること。
お互いを大切にする気持ちが身近なところから広がっていけば、きっと世界は変わっていくはずです。資料館の出口にあった「平和への誓い」には、「私たちは、再び過ちをくり返しません」と書かれています。その言葉を見て、私は、これから生きていく中で、戦争を知らない世代だからこそ、その記憶を語り継いでいかなければならないと強く思いました。

一人では小さな声かもしれないけれど、その声が集まれば、大きな力になると信じています。私は広島で、戦争の記憶が今も確かに残っていること、そしてそれを伝え続ける人々がいることを知り、「戦争は過去の話」ではなく、「未来の私たちに関わること」なのだと思いました。

私は、広島を訪れることができず、本当によかったと、心から思います。本や教科書では感じられないものを、自分の目で見て、自分の足で歩いて知ることができました。今回の訪問で、「平和」という言葉の意味が、少しずつ私の中で形を変えていくのを感じました。

これからも、私は人とのつながりを大切に、身近なところから「小さな平和」を守っていきたいです。そうすることで、あの日広島で失われた尊い命に少しでも報いることができる、そう信じています。

祖母から聞いた戦争の話

第五中学校 一年

中村 瑠 亜

僕の祖母は、現在八十九さいです。僕は祖母から、子どものころに体験した戦争の話を直接聞きました。その話は教科書で学んだ出来事よりもずっと生々しく、強く心に残りました。

祖母が五さいの十二月八日、日本がアメリカやイギリスと戦争を始めました。祖母はその日、お店の中で三輪車に乗って遊んでいました。するとラジオから「戦争が始まった」という声が流れてきました。祖母は幼くてよく分からなかったけれど、「大変なことが起きた」という空気だけは感じ取ったと話していました。

戦争中は学校にいても安心できませんでした。授業をしていても空

襲警報が鳴るとすぐに教科書やノートをまとめ、防空頭巾をかぶって避難しなければなりません。ある日、下校途中で本当に爆撃にあい、祖母は近くの家の軒下に伏せて助かったそうです。翌日、校長先生から「生徒が一人、家に爆弾が落ちて亡くなりました」と伝えられた時、教室中が恐怖に包まれました。

暮らしもとても苦しいものでした。食べ物や衣服はすべて配給で、ご飯は麦や芋を混ぜたものでした。お菓子はほとんどなく、靴下の代わりに布で作った足袋たびをはいたと祖母は話していました。それでも「戦地で戦っている兵隊さんのほうがもっと大変だと思ったから、文句を言う人はいなかった」と教えてくれました。当時の人々の強さに僕は驚きました。

やがて空襲が激しくなり、祖母は御殿場へ疎開しました。田舎の学校では親切な友達に助けられ、少し安心できましたが、戦争の恐怖がなくなったわけではありません。ある日、突然機銃掃射に遭い、田んぼの土手に必死に伏せて命を守ったこともあるそうです。

そして昭和二十年七月十六日の夜のことです。叔父さんの大きな声に呼ばれて外へ出ると、南の空が真っ赤に燃えていました。沼津の町が空襲を受けていたのです。祖母は恐ろしさで声も出ず、ただその光景を見ていたといえます。夜空にはひらひらと光が落ちていくのが見えましたが、それは爆撃のための照明弾だったと後で知りました。

そのとき祖母の父、つまり僕のひいおじいさんは沼津に残っていました。疎開先からはただ空が赤く染まるのを見ているしかなく、「お父さんは無事だろうか」と心配でたまりませんでした。やがて汽車が動

くようになり、親戚がひいおじいさんの様子を見に行きました。幸い命は助かっていて、裏の家の人たちと一緒に小さなバラックを建てて暮らしていたそうです。しかし町には大勢の死者が出て、沼津の様子は一変していました。祖母はその話を聞き、心の底から「お父さんが生きていてよかった」と思ったと語ってくれました。

そして一か月後の八月十五日、学校で天皇陛下の放送を聞きました。大人たちは涙を流していましたが、祖母は「戦争が終わった」という言葉を聞き、胸がいっぱいになって涙は出ず、むしろ笑いたいような気持ちになったそうです。長く続いた恐ろしく残酷な戦争がやっと終わったのです。

僕は祖母の話聞いて、今自分が過ごしている日常がどれほどありがたいかを強く感じました。安心してご飯を食べられること、友達と勉強できること、夜ぐっすり眠れることなど、色々それらは決して当たり前ではなく、戦争を生き抜いた人々の願いの上にあるのだと思いました。

祖母は「二度とあんな思いはしたくない」と言いました。僕は絶対にこの言葉を忘れず平和を守るためにできることを考えていきたいです。そして、祖母の体験や思いを私たちの世代で終わらせず、これからもずっと語り継いでいきたいと思えます。

マンガを通して平和を繋ぐ^{つな}

第五中学校 三年

重田 結和

私は本やマンガが好きです。本は私達の想像を膨らませ、マンガは現実にはないような不思議な世界を私達に見せてくれるからです。

戦後八十年となる今、原爆の記憶をどう受け継ぐかが問題となっています。原爆を経験した人が減る中で、あの日を知らない私達はどうやって受け継いでいけばいいのでしょうか。

私は、テレビで放送された、映画「火垂るの墓」を見ました。この映画は本が原作だと一緒に見ていた祖母が教えてくれました。私が特に印象に残った場面は、空襲により孤児になった主人公と妹が知り合いの家に引き取られ暮らしていたところです。他の大人がお国のために働いているのに、主人公は働きに行かず、妹の相手をしていました。それが気に食わなかったお婆さんは、二人のことを邪険に扱うようになっていきました。確かに働きに行かないのは悪いし、当時は自分達のことです。確かに働きに行かないのは悪いし、当時は自分達のことです。確か一杯だから、当たりが強くなるのは仕方ないことだけれど、同じ日本人なのに助け合うこともないのが、見ていて悲しかったです。

また、私はテレビの特集をきっかけに「はだしのゲン」を読みました。「はだしのゲン」はマンガなので、絵がついており、当時の様子が

文章よりもよく分かるからとても良いものだと思います。このマンガでは、朝鮮から来た人を馬鹿にするような、当時の人種差別の情景や、アメリカ兵に追い詰められて自害する人々の様子など、当時の様子が細かく描かれていました。特に衝撃的だったのは、原子爆弾が投下された直後の話です。主人公はコンクリートの壁により無事でしたが、そのすぐ近くでさっきまで話していた女性は顔がどろどろに溶けた状態で死んでいました。また、主人公が家族と合流すると、父親と姉と弟が家の下敷きになって出られなくなっているのです。どうしても助け出すことができなくて父親に後押しされ、主人公は無事だった母親と二人で逃げます。目の前に大切な人がいてまだ生きているのにそれを見捨てて逃げなければいけないところが見ていても悲しくなりました。

原子爆弾は日本国民の当たり前だった幸せを一瞬にして奪い去りました。戦後、アメリカでは「原爆を投下したから、戦争は終わった。」「原爆を落としたのは日本が降伏しなかったからだ。」といていたとテレビの特集で知りました。アメリカから見れば、そうかもしれないかもしれません。原爆が落とされなかったら、日本は止まらなかつたかもしれない。しかし、それでも私は原爆はあつてはならないものだと思います。原爆で吹き飛ばされ影だけになった人。大量のガラスが目突き刺さり、目が見えなくなつてしまった人。原爆の放射線によって髪が抜けてしまった人。そんな人々を知っているのは日本だけです。この悲しくて悲惨な記憶をたとえ経験していなくても、未来の日本が、世界が平和になるように願いを込めて伝えていくことが大切だと思います。

私は本やマンガが好きです。本は私達の想像を膨らませ、マンガは現実にならないような不思議な世界を私達に見せてくれるからです。でも、今回私は、本やマンガをきっかけに戦争という現実を知りました。マンガで空想の世界を見ていた今までとは変わり、マンガを通して、私は戦争を知り、考えるきっかけをもらいました。今、原爆を経験した人達は少なくなつており、直接話を聞く機会は、更に少なくなつていきます。そんな今だからこそ本やマンガは、あの現実を知り、考えるきっかけになると思います。私は本やマンガが好きです。本やマンガで知った戦争や原爆の惨劇を忘れず、平和について考え続けていこうと思います。

戦争と向き合う

片浜中学校 三年

瀧澤 紗 来

「戦争。」最近この言葉を耳にすることが増えてきた。三年に進級してから、戦争のことを考える機会が多くなつたのだ。

六月二十三日、私はこの日が沖縄慰霊の日だということは今まで知らなかつた。知るきっかけとなつたのは、その日何も考えずに見ていたテレビニュースだった。テレビに映っていたのは、沖縄県の平和祈念公園。そこには、平和の礎というものがずらりと並べられていた。

この礎には沖繩戦などで亡くなったすべての人の名前が刻まれている。礎の前では、親族が手を合わせていたり、大粒の涙を流したりしていた。なぜこんなにも多くの命が奪われなければならなかったのか。私はテレビ越しに見るその光景に胸が痛んだ。

しかし私はまだ、戦争のことを分かっている。いや、ニュースで少し目にしただけで分かった気になってはいけない、もっとよく知らなければならぬ、そう感じた。

そんなとき、ある日の国語の授業で、実写版「はだしのゲン」を見た。

この物語は最も悲惨な戦争、第二次世界大戦真っ只中のことが描写されている。空襲警報が鳴るたび、人々は不安を抱えて防空壕に隠れる。十分な食料も食べられず、「お腹が空いた」と繰り返す日々。そんなある日、空襲警報もならず原爆が落とされる。その瞬間、熱波が人々を襲い、気がつけば、周りの建物も、人もいなくなっていた。このたった一発の原爆によって、当たり前だった日常が一瞬でなくなったのだ。少し前、「この物語は」と言った。しかし、これらは実際にあった出来事だ。地震などの自然に起きた災害でも沢山の人が恐怖を感じているのに、人の手で、人の意志で爆弾を落とされるなんて、自然災害の何百倍も怖い。

私は、戦争を体験した時のことを身近な人から聞いてみたいと思い、私のおばあちゃんから、ひいおばあちゃんの話聞いた。ひいおばあちゃんは御殿場の東山に住んでいた。そこへ時々、兵士の方が訪ねてくることがあったそうだ。ひいおばあちゃんの家にはお米があったた

め、そのお米を食べさせてあげたりしていた。しかしお米は茶色い玄米。今のような真っ白なお米ではないのだ。精米したお米は貴重だったのだから。他にも、兵士の方の怪我を治療したり、千人針というものを縫い、兵士の方の無事を願うこともしていたらしい。ひいおばあちゃんも戦争に向かっていたが、行ってすぐに終戦したと聞いた。少しの間だったものの、戦地に転がっている沢山の兵士の死体を目の当たりにし、無事に帰ってきた後しばらく眠れなかったそうだ。戦争というのは、人の身体だけでなく、心までも傷つけてしまう恐ろしいものだ。ひいおばあちゃんも、爆撃音の恐怖で震えが止まらなかったこともあり、当時のことはあまり話したがらなかったという。

こんなに身近なところにも、あの頃の悲惨な戦争を体験した人がいた。身近な家族から話を聞くことで、戦争の生々しい現実をより近くに感じた。

今の日本は、平和主義によって戦争が起こらないよう守られている。平和だからこそ、この恐ろしい戦争の記憶を「物語」のように思ってしまう人もいようだろう。

だが、その平和をこれからも守り続けていくためにも、怖くて悲しくなることだからといって、戦争のことから目を背けずに向き合っていくことが大切だと感じた。もし、近くに戦争を体験した人がいたのなら、一度話を聞いてみるのもいいかもしれない。

自分から知ろうとし、向き合っていくことが、私達がこれから過ごす未来につながっていくのではないだろうか。

未来は必ず変えられる

金岡中学校 二年

多田 稀保

「戦争がなければ平和なのだろうか。」

私は「平和」という言葉を聞いたとき、まずこの問いが頭に浮かんだ。今も世界では、ウクライナとロシアの戦争が続き、多くの人々が傷つき、命を失っている。ニュースで流れてくるのはその一部にすぎない。その裏で、名前も知られない人たちが、毎日苦しみ、泣いているのだと思うと胸が痛む。

戦争はない方がいい。そんなことは誰もが知っているはずだ。小説や映画、アニメでも繰り返し「戦争を忘れないで」と伝えられてきた。それでも、どうしても戦争はなくならないのだろうか。もしも戦争がなくなっても、大切な人を奪われた人の悲しみは消えるのだろうか。日本は唯一の被爆国であり、戦後八十年を迎えた今でも、原爆や空襲で家族を失った人々の苦しみは続いている。そのことを思うと、「戦争さえ終われば平和になる」とは、とても言いきれない。

私はウクライナとロシアの戦争について調べてみた。ニュースを見てなんとなく知っているつもりだったが、本当の理由は知らなかったからだ。調べていくうちに、この二つの国の間には、簡単には語れない長い歴史があることを知った。さらに、かつての戦争や支配が今の

争いにも影響していることがわかった。戦争が次の戦争を生む——。その現実を知ったとき、私は絶望的な気持ちになった。

今年の夏、私は台湾を訪れた。街のにぎやかさや食べ物の香り、親切な人々にふれ、日本とは違う魅力を感じると同時に、どこか日本人に似た雰囲気もあり、不思議な安心感を覚えた。電車で隣に座ったおばあさんが、現地の言葉で話しかけてきたとき、私は理解できずに困った。勇気を出して英語で「日本人です」と伝えると、そのおばあさんは片言の日本語で話してくれた。タクシーに乗ったときも、運転手さんが日本語で対応してくれた。どの人も笑顔で、とても親切だった。そのやさしさに、私は胸があたたかくなった。しかし帰国してから、どうしても日本語が通じることになり、台湾と日本の歴史を調べてみた。そして、そこにも戦争が深く関わっていることを知った。日本が台湾を領土にしていた時代、日本語を強制的に学ばなければならなかったこと。歴史を知った瞬間、台湾で受けた親切や笑顔を思い出し、私は胸が締めつけられる思いがした。あの人たちのやさしさの裏には、私が想像できない苦しみや悲しみの歴史があるのだと思った。

一見、平和に見える関係でも、その下には過去の痛みが隠れている。仲良くできて見えるように見える国同士の間にも、乗り越えてきた複雑な感情がある。そして、今も世界のどこかでは、いつ新しい戦争が起きてもおかしくない状況がある。

戦争がなければ平和か——私はまだこの問いに答えを出せない。なぜなら、かつて「平和を守るため」という理由で始まった戦争もあったからだ。けれども、はっきり言えることが一つある。戦争から平和

は生まれない。平和は、戦争をしないという決意からしか始まらないのだ。過去の出来事を変えることはできない。しかし未来は、私たちが選び、つくっていくことができる。私は思う。未来の誰かが「この世界は平和だ」と心から言えるように、私たちは今の社会を築いていかなければならないと。戦争をしないことでしか、平和への道は開けない。だから私は、平和について考えることをやめない。そして、自身の小さな行動からでも「平和な未来」をつくっていききたい。

平和と幸せの質の違い

金岡中学校 二年

井出 千香子

平和と幸せの関係とは何だろう。私はこの問いについてよく考える。辞書で調べると、平和とは「戦争や暴力のない、穏やかで安定した状態のこと」とある。一方で幸せは「その人にとって不満がなく望ましい状態のこと」だそう。つまり平和は社会全体の状態を示し、幸せは一人ひとりの心の状態を表す言葉だと分かる。しかし、この二つは必ずしも同じ方向を向いていないように思う。日本は戦後八十年、戦争のない時代を生きてきたのに、世界幸福度ランキングでは五十五位と決して高くない。なぜ戦争がなくても「幸せ」だと感じられないのか。このことには、幸せの質の違いが深く関わっていると思う。

私が初めてリアルタイムで戦争の映像を見たのは、ロシアとウクライナの戦争だった。テレビのニュースで爆発や避難する人々の姿を見たとき、私は強い衝撃を受けた。戦争は教科書の中の昔の出来事だと思っていたからだ。しかし三年半がたった今では、その衝撃も薄れてしまった。毎日のように報道されていても、どこか他人事のように思ってしまう。おそらく、直接自分に危険が及ばないからだろう。ガソリンや食料品が値上がりしたときなど、生活に影響があるときにだけ、戦争を近くに感じるのだ。海に囲まれた日本は、ヨーロッパやアジアのように国境を接していない。そのことも、私たちが戦争を遠くの出来事だと感じてしまう理由かもしれない。私は日々の暮らしの中で、「幸せだ」と思う瞬間がある。家族と食卓を囲むとき、友達と「また明日ね」と声をかけ合うとき、休日に遊ぶ約束をするとき。衣食住が保証され、学校に通い、明日の予定を考えられることこそ、本当は大きな幸せなのだと思う。けれど、人によって幸せの感じ方は違う。中には「世界から戦争がなくならない限り、自分も平和であるとは言えない」と考える人もいるだろう。私のように身近な暮らしの中に幸せを見いだす人もいる。ここにこそ、幸せの質の違いがあるのではないかな。大切なのは、その違いを認め合いながら、当たり前前の幸せを忘れないことだと思う。

怖いのは、当たり前前の幸せに気づかず、欲望ばかりを追い求めてしまうことだ。もつと裕福になりたい、もつと土地がほしい、もつと支持されたい——そうした思いが強くなると、周りが見えなくなり、やがて争いの原因となってしまう。欲望は満たしても終わりが無い。け

れども幸せは、人との関わりの中にこそ生まれる。人と支え合い、分け合い、助け合うときに、心の中に本当の幸せが灯るのだと思う。

唯一の被爆国である日本は、戦争の恐ろしさを知っているはずだ。それなのに、平和な暮らしをしていながら幸せを感じにくいのは、幸せのコンパスが「欲望の方」に向いてしまっているからではないだろうか。平和は幸せの土台であり、なくてはならないものだ。その上でどのような幸せを求めるかによって、社会の姿も変わっていく。だから私は、日々の生活の中で「平和があるから幸せなのだ」と感じられる人でありたい。当たり前にある暮らしを当たり前と思わず、感謝すること。人と人のつながりの中にある幸せを大切にすること。それが、これからも平和を守り続けるために必要なのだと思う。

逆転しない正義

金岡中学校 三年

伊藤紫野

NHKの朝の連続テレビ小説、「あんぱん」を観て、私は平和や正義とは何なのかを考えさせられるようになりました。このドラマは、「アンパンマン」を生み出した漫画家のやなせたかしさんと暢のぶさんの夫婦をモデルに、苦悩の日々やそれでも夢を忘れなかった二人の人生を描いています。

私は、このドラマの中で主人公の嵩たかしが言った、「正義は逆転する。…じゃあ、決してひっくり返らない正義って何だろう。」

という台詞がとても印象に残っています。この問いは、物語を形作る重要な要素となっているものでもあります。

やなせさんは、若い頃に戦争を経験しました。当時正義だとされていたのは、「敵を倒すこと」で、そのために多くの人が命をかけた。しかし、戦争が終わると、それは突然悪になりました。その時、やなせさんは、時代や国、立場などによって簡単に逆転してしまう正義というものに大きな疑問を抱きました。そして、その経験から「アンパンマン」というキャラクターが生まれました。

アンパンマンの正義は、困っている人を助けるために、お腹が空いた人に自分の顔を分け与えるというものです。戦って勝つことが必ずしも正義ではなく、誰かを助けたり喜ばせたりすることが本当の正義であるというやなせさんのメッセージが込められています。

作中では、正義が時代や立場によって簡単にひっくり返ってしまうものだとしたら、自分は何を信じればいいのかという不安の中、どんなときも変わらず大切にできるものを模索する嵩たかしの姿が印象的に描かれています。そして、そんな中で探し出した、「困っている人へ手を差し伸べる」という逆転しない正義は、やなせさんが一生を通して伝えようとした平和のあり方なのだと思います。

この考え方は、私達の暮らしている現代社会とも深く関わりのあるものだと思います。ニュースや新聞では、国同士、人同士での対立が

絶えず報道されています。お互いに、自分が正しいと主張しあい、ときには暴力や攻撃に発展してしまうこともあります。そんな中で、一人ひとりが「誰かのために行動することが正義である」という考え方を持つことができれば、世界は少しずつでも変わっていきけるのではないかと私は考えます。

また、この「逆転しない正義」は、国や世界など、大きな出来事の中だけではなく、私たちの身の回りの身近な出来事の中にも必要な考え方だと思います。友だちが困っているときに手を差し伸べたり、声をかけたりすることには、誰かを助けたいという思いが込められています。しかし、私は今までそれをなかなか行動に移すことができませんでした。けれど、やなせさんの考えに触れた今、私は、目の前にある小さな正義を、迷わず実行できるような人でありたいと考えるようになりました。たとえそれが目立つようなことではなくても、誰かを思いやることは、否定することのできない、「逆転しない正義」そのものであるからです。

正義とは、誰かを攻撃して倒すことではなく、誰かと助けあって、支え合うことである。自分自身の戦争体験や、人生の中での苦しみを通じて、やなせさんは、その答えにたどり着きました。そして、それを多くの人に伝えるために、「アンパンマン」を描き続けました。

私もこんなふうに、自分自身の「逆転しない正義」を大切にできる人でありたいと強く思います。周りの人を思いやることや、困っている人に手を差し伸べることを、自分にできることをしっかりと行うことなど、小さな行動の中に、本当の正義や平和が隠れているのではない

だろうかと私は思います。やなせさんの生き方や考え方から学んだ大切なことを胸に、私もこれから、優しさで強さをもった人へと成長していきたいです。

平和を願い生きること

金岡中学校 三年

小松聖河

終戦から八十年という節目の今年。テレビでも多くの特集がされている。広島、長崎の原爆の話、戦争を語る特集、たくさんものを目にし、耳にする機会があった。それだけでなく、今も世界では戦争が行われ、多くの命が奪われている。そのような中、僕はいまひとつ、戦争を自分事としてとらえられない。なぜだろうと考えたとき、直接誰かから話を聞いたこともなく、戦争というものが身近な話ではないからだと思った。

そこで、自分の住んでいる沼津では、戦時中にもどのようなことが起きたのかを調べてみることにした。

いろいろと調べていくうちに、沼津市遺族会というところがあることを知った。そして平成二十三年に発行された「戦争と平和」という本を見つけた。そこにはとある家族の話が書かれていた。それは、結婚してまもない夫を戦争で亡くした女性の話だった。

戦時中に結婚、彼女の妊娠中に夫が出征、まもなく子どもが誕生。空襲、敗戦、焼け跡からの戦後復興。夫の戦死公報……。遺骨を取りに行き、家で白木の箱を開けると、中に夫の名前と年齢が書かれた紙切れが一枚入っていただけだったそうだ。これが、彼女に戦時中に起きた出来事だという。当時の状況が具体的に書かれているその文章を読み、僕は言葉にならなかった。ここに書かれていたことはそれだけではなかった。辛く苦しい状況に涙を流すことも許されないような中、亡き夫の両親と子どもとの「生きていくための生活」なども書かれていた。本を読んでいる間、実際に戦争を経験したことのない僕でも、当時の辛く、苦しい光景が目に見えてきた。この話を母に話したら、「きっと、旦那さんの分まで生まれてきてくれた我が子を必死に育てたんだろうね。」

と言った。

「母親はね、我が子のためなら自分を犠牲にしても構わないんだよ。」
どの時代も、母が子を思う気持ちは変わらないのだと思った。そして、優しく語りかけてくる母の姿を見て、自分より子どものことを考えてくれているという母の愛情は、本当にありがたいことだと思った。
今の日本は、日本国憲法第九条に基づいて、戦争の放棄を定めている。だから、現実的に僕が戦争に行くようなことはないのかもしれない。しかし、もし僕が戦争の時代に生まれていたら、戦争に行かなければならない状況で、何を感じ、何を思ったのだろうかと思うと、考えてもなかなか答えが見つからない。今の日本は、戦争もなく平和なのかもしれない。しかし、世界に目を向ければ、あの母親と同じよう

に、「今を生きる」ために、必死に毎日を過ごしている人達がいる。そのことを僕たちは忘れてはいけない。戦争をすることは良くないことだ。そして、それと同じくらい、「自分には関係ない」と関心をもたないことも良くないことだと僕は思う。

戦争から八十年がたち、実際に戦争を体験した人が少なくなってきた中、僕は今の日本が実現している平和というものを噛み締めながら生きている。そして、その当たり前にあると思っっている平和が崩れてしまわぬように、また崩れてしまったとしても、自分がどのような行動をするべきなのか、考える必要があると思う。僕はまだ、力も知識もないただの中学生だ。しかし、そんな僕でも自分や自分が大切に思っている人たちを守るために、何かできることが必ずあるはずだ。争いが起きないことが一番良いことだとは思いますが、争いごとがいつ起こるのかは、誰にも分からない。戦争を体験した人々が、今を生きる僕たちに言葉や記録を残してくれている。それに耳を傾け、二度と戦争が起これないよう願いながら、僕は毎日を生きていきたい。

戦争とのつながり

大岡中学校 三年

古屋 大和

最近、テレビのニュースなどで原爆のことをよく聞く。広島と長崎に原爆が落とされてから八十年が経ったからだ。一九四五年八月六日と九日に広島と長崎に原子爆弾が投下され、壊滅的な被害をもたらした。この攻撃は第二次世界大戦を終結させるためのものだったが多くの人が犠牲になった。

そして今もお苦しんでいる人もいる。彼らは、やけどによるケロイド、白血病、がんなどの病気、また、精神的なトラウマ、うつ病、不安障害などに今現在も悩まされている。また被爆者だけでなく被爆者の家族にも影響が出ることもある。僕の知らないところで、未だに苦しんでいる人がいると考えると、僕たちは、原爆のことや被爆者のことなどをしらないといけないと思った。

今年の文化祭で、僕のクラスは原爆がテーマの「消えた八月」という曲を歌うことになった。「消えた八月」には、一九四五年八月に広島に原爆が投下されたことによる被害や、その悲惨などが表現されている。歌詞には「熱い光の中で僕は一枚の絵になった」「熱い風の中で君はひとつの石像になった」などの爆発時に放出された熱線によって、周囲の物体が焼けて変色する際に、人が遮蔽物となり、その部分だけ

が焼け残り黒い影になった原爆が落ちた直後の様子を表している。また「僕の好きな八月は」から「しかしすべては消えた」「血の一滴すら流すことなく」の歌詞から、楽しくてワクワクするような大好きで楽しみだっただけの夏が、熱い風と毒された空気の中で光に打たれ、血の一滴すら流すことなく、一瞬にして打ち消された悲しみ、喪失感などが表されている。僕はこの曲を初めて聴いたとき、僕と同じくらいの人か、それより幼い子が、なんの罪もないのに自分の住んでいる町ごと焼き消され、この世を去ってしまったのかと考えると胸が苦しくなった。そして、この悲しみ、喪失感などの気持ちを心に刻み、思いを込めてこの曲を歌いたいと強く思った。

戦争で悲しい思いをしたのは広島と長崎への原爆投下だけではない。東京大空襲、沖繩戦、本土空襲など、日本各地で空襲が起き、たくさんの人々が苦しみ、悲しい思いをした。それは僕の住む町、沼津も同じだった。一九四五年七月十七日、沼津大空襲が起きた。沼津には軍事施設や多くの工場があったことから空襲の目標となったそうだ。そして現在の大手町付近を中心に米軍機約百二十機が来襲。九千発を超える焼夷弾が投下された。その結果、二百七十四名の死者、五百五名の重軽傷者、そして市街地の八十九・五%が焼失するという甚大な被害をもたらした。またこの空襲以前にも数回、小規模な空襲を受けていてそれらを合計すると三百二十二名の死者、六百三十四名の重軽傷者が出たと言われている。僕の今、息をしているこの場所で大勢の命、心が奪われたと考えると今にでも涙が出てきそう。よく調べたら僕の住んでいる近くには爆撃によって傷がついた橋があったり、敵機を

迎え撃つための高角砲が残っている公園があったりなど沼津市内には全部で八十カ所の戦争の痕跡があることがわかった。それらのものは全て撤去や修理がされず、そのまま残っている。それは次の世代に受け継がないといけない歴史だからだ。だから僕も、もう戦争が二度と起こらないように、誰も戦争で悲しむことがないように、この戦争の教訓や悲惨さを次の世代に伝えたいと思った。

僕の身の回りにこんなにも多くの戦争とのつながりがあったなんて思いもしなかった。こんなにも残酷で悲しい思いをもう二度と繰り返さないように、大勢の人々に戦争の悲惨さ、自分の故郷での戦争の歴史を語り継いでいこう、と強く思った。そして今度の文化祭の合唱で、戦争で苦しんだ人たちやその家族を思い、その思いを声で表現して全校に伝えると決心した。

戦争を繰り返さないために

大岡中学校 三年

宇野衣織

私は、終戦の日が近づくとテレビから流れる戦争の話を聞き、曾祖母が話してくれた戦争の話を思い出す。当時の人々の暮らしは今では想像もできないほど大変だったと思う。私たちが今できている生活は、当時の人たちにとったら当たり前のことではなかった。

私は曾祖母が亡くなる前に、戦時中の話を聞いたことがあった。当時女学生だった曾祖母は、姉や妹と戦争のために使う武器を作っていたと話してくれた。その時代では、私たちと同じような年齢の人たちも戦争のために長時間働いていたことを知り、とても驚いた。サイレンが鳴ると防空壕に走った話や、ご飯はかさを増すためにさつまいもを混ぜたり、芋のツルを煮て食べたりしていたほど貧しかったという話など、当時の生活は本当につらかったという話をしていった。

曾祖母が戦争の話をしてくれるときは、いつも目を固く閉じて、一生懸命思い出しているようだった。そのときの顔は今でも忘れられないほどとても苦しそうで、曾祖母の顔から当時の人々の生活の大変さが伝わってきた。そんな思い出したくもないようなつらい話を、戦争を経験した人たちが、経験したことがない人たちに語り継いでくれたのは、もう二度と同じことを繰り返してほしくないという強い思いを持っていたからだと思う。よく曾祖母は「あんたたちは幸せなんだ。」と話してくれた。その言葉からも感じる事ができる。そんな人たちの思いを無駄にしないためにも、戦争は絶対に二度と繰り返してはいけないことだと思う。

終戦から八十年経った今の時代、戦争を実際に経験していた人たちが少なくなってきたので、戦争を経験したことがない人たちに語り継がれる機会が減っている。

先日、何気なく見ていたテレビ番組で、今の人たちは本を読まなくなっているという話を聞いた。今の時代では、自分が知りたいことだけをスマホやパソコンで検索して調べることができるので、いろいろ

な情報が書かれている本は、自分が知りたいこと以外の情報が鬱陶しく感じてしまうという内容だった。確かに知りたい内容だけを調べることができればそのほうが楽だけど、本を読むことで、スマホやパソコンで調べるよりもその知りたいことについて詳しく知ることができるので、読書をするのはとても大切なことだと思う。その内容の背景など、自分が知ろうとしていること以外も知ることができる本を読み、知識を深めることが大切だと思う。

私は最近、戦争がテーマの『あの花が咲く丘で、君とまた出会えたら。』というものを読んだ。この本はフィクションで、そこまで戦争に対する描写も鮮明ではなかったが、戦争のことについて少し知ることができ、当時の様子を想像することができた。最近は実際に戦争を経験した人たちが少なくなり、本も身近なものではなくなってきた。戦争について知る機会がだんだん減ってきていると思う。戦争は風化させてはいけないことだし、これから先戦争が起きないためにも、知る機会は減らしてはいけないと思う。だから、これから先も戦争について語り継がれていくためには、その時代にあった形で、戦争を繰り返してはいけないという思いを伝えていくことが大切だと考えた。

私は、戦争のことについて触れる機会が少なくなり、今ある平和が当たり前前に思えてしまうことに焦りを感じた。現在、日本では戦争をしていないため、自分が過ごしている時間は自分のためだけに使える。しかし、世界中を見れば、そうではない人も少なからずいるのだ。資源、領土の奪い合いや、意見の違いがあり、そこに武力が入ると戦争は起こると思うが、それをどう引き起こさないかを考えることも重要

だと思ふ。

きゅうり…曾祖父の話聞いて

愛鷹中学校 二年

橋村 漣 人

私は、ニュースで戦争についての映像を見るたびに、なぜ争ったり奪い合ったりするのだろうと考えることがあります。人々が何かを決めようとするたびに争いが起こります。ニュースを見てみると多くの人が戦争で命を落としたことやどこかの国同士や日本政権での採め事などが報道されていることがあります。そのたびに争いが起きます。SNSでも、あることに対してこっちは正しい、そっちは間違っている、など口論になっているのを見かけたりします。社会の授業では、戦争について、また戦争がどれほど人の命を奪ったかということについて、小学三年生くらいの時から学習してきました。私は、私たちの言動や態度が他者に対して優しさや共感を持って接していくことが、平和な世界を作り出すために必要な第一歩だと思います。国々が協力し合い対話を通じて問題を解決していくことが何よりも大切だと思います。

私の曾祖父は、きゅうりが大好きでした。ですが第二次世界大戦時、十五歳という若さで兵士の訓練生として岡山から九州に行かされたそ

うです。そこでは、食事は毎回満足のいく量は出ず、きゅうりの味噌汁ばかり食べていたそうです。その影響で曾祖父は、きゅうりと味噌汁が大嫌いになったそうです。曾祖父の兄は成人していたため軍隊に召集され戦地に行ったそうです。そして終戦後シベリアに移送されました。シベリアでは収容所に入れられ過酷な労働を強いられたそうです。今の私達は比較的とても幸せに暮らせています。学校にも行けるし、困ったら助け合い協力してくれる家族や友達、先生がいます。自分が曾祖父や曾祖父の兄の立場だったとしたら恐怖心に包まれます。家族と離れ厳しい訓練をさせられたり戦地に行つて国のために戦つたりすることがどれだけ不安で怖かったか、考えると本当に辛かったと思います。

平和とはなにか、辞書やスマートフォンで調べてみると「戦争がなぐ穏やかで無事なこと。」と書いてありました。私は、戦争の反対が「平和」ではないと思います。戦争が起きなくても暴力や人種差別がある限り平和な世界にはならないと思います。ですが争いを減らすことが平和な世界を作る大切な一歩であると思います。このように大好きなものが大嫌いなものになってしまうことがあります。原爆ドームなどの戦争で焼け残つたものや戦争に関する本やサイトで自ら調べて、見て知つて考えることで何気ない日常がかけがえのない幸せだと感じることができると思います。だから私は、他者の意見を尊重して問題を解決していくことが何よりも大事だと思います。

本当に「知る」戦争

愛鷹中学校 三年

大 嶽 宏 太

(私は戦争を知っている)(平和の尊さを知っている)あらゆる情報源から、これまで行われてきた戦争や今も続く戦争の情報が当たり前のように入手できるこの日本で、学校で幾度も平和について考えてきた私はこう考えていました。多くの日本人は普段から、今日も平和で幸せだなどと考えることはないと思います。無論私もその一人でした。しかし、ある日を境に考え方を改めることとなりました。

とある夏の日、一つの神社に興味を持ちました。東静岡駅近くにある「静岡縣護國神社」です。神社巡りが趣味の私は、「護國神社」という言葉に惹かれこの神社へ行きました。鳥居をくぐり、まず目に入るのは御祭神についてでした。「静岡県の英霊七万六千二百三十柱」これを目にした私は思わず声をあげました。なぜなら、戦争で亡くなつた方の数が静岡県だけでこんなにも多いのかという衝撃を受けたからです。そして同時に、静岡だけでこれほど多く死没者がいることを知らなかった自分が歴史に無関心だったことを痛感しました。

この地が英霊を祀る神聖な場所だと知りつつ、境内を進んだ私はある石碑を見つめました。「拓魂碑」という石碑です。これは、満州国の崩壊によって難民になってしまった、満州開拓のために駆り出された

青少年などを偲ぶという目的の石碑だと説明がありました。それを目にした時、一つのことを思い出しました。今は亡き曾祖母の話です。曾祖母は幼い頃中国の満州で働かされていて、非常に大変な思いをしたという旨でした。この話を思い出した瞬間、点と点が結ばれたような気持ちになりました。曾祖母は満州へ開拓に向かっていたのかという驚きを感じながらも、私はその石碑に手を合わせました。また、石碑は他にもありました。そこには、「ミンダナオ島」や「グアム島」などのあまり耳にしない、知らないような島での戦いについての説明が多く書かれていました。

その後、参拝を済ませ一息ついたところで私は思いました。私は戦争について知っているようで、何も知らなかったのではないかということ。静岡県でどれほどの人が戦地に駆り出されたのかわからなかったです。満州開拓があったことも知りませんでした。名も知らぬ島で戦いがあったことなど、聞いたこともなかったです。社会や道徳の時間、平和について幾度も考えてきた私は、平和の大切さは知っています。しかし、今の平和がどのような人々の努力や犠牲の下成り立っているのかを、全く知らなかったことに気がついたのです。私はこの事実、自らを恥じるばかりでした。そのとき初めて、自らの考えを改めることとなりました。平和の尊さを私はまだ知らないのだ、戦争が遺したものを知らないのだと。そして、決意しました。もっと歴史を学ぶことを。先人たちがのこしてくれた悲しい歴史が、今の平和を作っていて、その歴史を学ぶことだけが平和の尊さを知らしめてくれる唯一の記憶だと気づけたのですから。

今、人々は教科書に載っていることだけを学び、満足しているかもしれない。人々はネットで現在起きている戦争などのニュースを見て、日本の平和の存続を願っているかもしれない。しかし、平和は何もせず簡単に成し遂げられるものではありません。今を生きるわたしたちが平和を望み続けること、過去の出来事を継承することに怠惰になってしまったり、いつしか平和は崩れてしまいます。過去を知り、先人たちが命をかけて作り上げた平和を大切にしたいという志を持ち、平和を守ろうとする。このサイクルをより多くの人がこなしていくことが最も重要だと私は思います。過去を知ったうえで、平和に対する自分の考えを持ってたら更に素敵でしょう。平和を訴える基盤となるのは、過去の歴史だけということ、多くの人々が胸に刻んでより良い道を歩むことを心から願っています。

終戦から八十年を迎えた今だからこそ、過去から学び、心を育もうとする。そんな人でありたいです。

平和な今を未来へと

大平中学校 二年

土屋 未 徠

戦争とは、国と国、または民族や集団の間で争いが大きくなり、武力を使って相手を倒そうとすることです。

昔から人類の歴史の中で戦争はくり返されてきましたが、そのたびに多くの命が失われ、町や自然が破壊されてきました。戦争は兵士だけでなく、そこに住む普通の人々の生活をも壊します。家を失った人々は避難しなければならず、時には国を出て知らない土地で暮らすことになりました。言葉も文化も違う場所での生活はとても大変で、不安やさみしさを感じるでしょう。子どもたちは学校に通えず勉強する権利さえ奪われてしまいます。戦争は人々の未来も壊してしまうのです。

また、戦争は心に深い傷を残します。

大切な家族や友人を失った悲しみは、何年たっても消えることがありません。

恐怖や怒りの記憶が残り、人々の心に憎しみを生むこともあります。その憎しみが次の争いにつながり、終わりのない悪循環を生み出してしまふのです。だからこそ、一度戦争が起これば、傷をいやすにはとても長い時間が必要となります。

現代の戦争は昔と少し違っていています。昔は剣や銃で戦っていましたが、今はミサイルや爆弾、そして核兵器のような強力な武器があります。特に核兵器は一度使われれば何十万人もの命を一瞬で奪い、町を廃墟きょに変えてしまいます。さらに放射能の影響で長い間その土地に住めなくなってしまうのです。

日本は広島と長崎に原子爆弾を落とされた経験を持つ国です。その悲惨さを知っているからこそ、核兵器を二度と使ってはいけないという強い思いを持つ必要があります。

では、戦争をなくすためにはどうすればよいのでしょうか。

一つの方法は、国と国の間で話し合いを続けることです。意見が違ったり、考え方がぶつかったりしても、すぐ力で解決しようとするのではなく、時間をかけて理解し合う努力が大切です。また、国だけでなく、私たち一人ひとりも平和を大切にすることを必要です。小さな思いやりや助け合いが積み重なることで、大きな争いを防ぐ力になると私は思います。

ニュースを見ると、世界のどこかで今も戦争や紛争が起きています。その映像の中には、私たちと同じくらいの年齢の子どもたちが映っていることもあります。彼らは決して戦争を望んでいないのに、避けることができず苦しんでいます。もし自分が同じ立場だったらと考えると、とても胸が痛みます。

だからこそ、平和な日本に生きている私たちは、その幸せを当然だと思ふのではなく、感謝し、守り続けなければならぬと感じます。

戦争をなくすのは簡単なことではありません。しかし、世界中の人々が平和でありたいという思いを持ち続ければ、少しずつ変えていけるはずです。学校で学ぶことも、友達と仲良くすることも、実は平和があるからこそできることです。

私は将来、大人になったときに、平和を守るためにできることを考え、行動できる人でありたいです。

そして、二度と戦争の悲しみをくり返さない世界になることを心から願っています。

記憶の断片

大平中学校 三年

大村 柀 登

今年で戦後八十年になる。戦争体験者は年々減少している。また、現在生きている戦争体験者の中でも戦争のことについて語るべきでない方がいる。その理由として、認知症というものがある。僕の曾祖母も現在、過去の記憶が曖昧になってきている。

曾祖母は、戦時中満州に住んでいた。そこで経験した事は現代を生きる僕には到底、想像できるものではなかった。同時に血が引いた瞬間のことを、今でも鮮明に覚えている。幼かった曾祖母の前で人が沢山死んでいったそうだ。曾祖母は、「いつか私もあななってしまったら。」

と、恐怖と絶望感に駆られていたそうだ。その事を話す曾祖母の声はいつもと違う声だった。

そんな曾祖母も戦時中の記憶が曖昧になってきている。最近、曾祖母に戦時中の話を聞いた時は、

「もうあんまり覚えていないよ。」

と、話を聞くことができなかった。しかし、いつまで経っても忘れないうものがあつた。それは曾祖父のことだ。曾祖父は曾祖母の結婚相手だった。曾祖父は優しく、素敵な人だった。そんな曾祖父のことを曾

祖母はいつも覚えていた。その理由は、二人で過ごした時間が「平和」だったからだ。僕は考えた。何も恐れるものがない時間に自由に行きたい所に行き、食べたいものを食べることでできた日常こそが今も輝かしい思い出として残っているのだと僕は思った。そして曾祖母が、「戦争をしていいことなんて一つもないんだよ。」

と言っていたことを思い出した。本当にその通りだと思い、平和な世界になってほしいと心から思った。そして僕は、「語り継がなければ。」と心に決めた。

以前、広島の学生が戦争について語り継ぐ活動をしているということをニュースで目にしたことがあつた。そのような活動はとても大切だと思う。だから、曾祖母の「記憶の断片」に込めた思いをしっかりと語り継ぎ、平和である大切さを少しでも多くの人に知ってほしいと思う。今の時代は、戦時中と全く違う。戦争についてよく知らない人も多いはずだ。そんな中、戦時中の出来事と自分を重ね合わせることで大切だと思う。それが平和につながる鍵だ。重ね合わせることで本物の平和が自ずと見つかる。そして、現代を生きる僕達が二度と戦争という残酷な出来事がおこらないようにしていかなければならない。曾祖母の口癖は、

「みんな仲良くね。」

だ。みんな協力し、その時その時で正しい判断をし、平和をめざしていきたい。

「幸せ。」

で溢れる世界になるようにしていきたい。そのためには個人の考えを尊重し、自分とは異なる意見を持つていてもそれを少しでも受け入れ、理解することが大切だ。僕が知っている「戦争」を誰かに伝えることで平和について一人一人がきちんと考えてくれるようなきっかけになれば良いと思う。

曾祖母へ―― 「風船爆弾」の話聞いて

長井崎小中一貫学校 八年

関野 ちふゆ

これは、私から曾祖母への手紙です。私は祖母から、あなたのことを聞きました。あなたが十六歳のとき、「風船爆弾」という兵器を作っていたと聞きました。風船爆弾とは、和紙をこんにやく糊で貼り合わせた気球に爆弾や焼夷弾を吊るし、偏西風に乗せて太平洋を渡らせ、米本土をねらった兵器です。製造には多くの女学生も動員されたといえます。その話を聞いて、私はとても驚きました。今では考えられないようなことだったからです。この手紙は、その話を聞いて、私が感じた気持ちを伝えたくて書いています。祖母は、「ひいおばあちゃんは気が強くて、真面目で、負けず嫌いで、頑張り屋だったよ」と話してくれました。「人に負けたくない」という気持ちで、周りの友だちが頑

張っていると、「私ももつと頑張る！」と、何でも一生懸命やっていたと聞きました。だからきつと、あなたは「戦争なんていやだ」と思いながらも、「自分も何か役に立たなきゃ」と思って、風船爆弾を作っていたのではないだろうか。

でも私は、それはやはりおかしいと思いました。人が人を殺すために、中学生くらいの女の子まで兵器を作らせられるような、戦争そのものが間違っていると思うからです。

「国のため」だとか、「勝つまで我慢」だとか、そうやって子どもまで働かせていたことが、本当に正しかったのかと思いました。あなたもきつと、友だちとおしゃべりしたり、勉強したり、お腹いっぱいご飯を食べたり、本当はそういうふうに通じたかったんじゃないですか。

でも、「ぜいたくは敵だ」と言われて、好きなこともできず、それでもあなたは、「自分も頑張らなきゃ」と思って、必死に生きていたんですね。私には想像できないけれど、どうやって「生き延びよう」と思ったのか教えてほしいです。きつと、ただ頑張るだけじゃなくて、誰かのことを思い、夢や憧れを持っていたからこそ、生きていられたんじゃないかなと思います。

私はその話を聞いて、「すごいな」と思うと同時に、とても悲しくなりました。私だったらきつと、「もう無理！やりたくない！」ってすぐに言ってしまうと思います。でもあなたが、あの時代を頑張って生きてくれたからこそ、今の私があります。今の私は、学校に行って、友だちと笑って、遊んで、好きなことをして、家族とご飯食べて、毎日

を過ごしています。それを当たり前だと思っていたけれど、あなたのように、つらい時代を生きてくれた人がいたから、今の平和があると思います。

でも世界では、今も戦争が続いています。家族を亡くした人、小さな子ども、何もしていないのに巻き込まれてしまう人たちなど、そんなつらい思いをする人が、これ以上増えないでほしいと思います。私はこれからも、あなたたちがつないでくれたこの平和を、しっかりと大切にしていきたいです。そして私も、次の世代に「平和は大切なんだよ」と伝えられる人になりたいです。あなたが生き延びてくれたから、今、私がここにいます。生き延びてくれてありがとう。

八十年目の今を問う

長井崎小中一貫学校 九年

大沼夏海

歴史の授業で学んだ平和で豊かな時代。戦前、しばしの好景気が訪れ、人々はおしゃれを楽しみ、食を楽しみ、家族との時間を楽しんでいたので。戦争はもう起こらない、幸せな時間はずっと続くと思っていたかもしれない。けれど、その「当たり前」はやがて崩れてしまった。その戦争こそ第二次世界大戦である。

今年第二次世界大戦から八十年という節目の年だ。現代を生きる

私たちは、もう一度「当たり前」について考えなければならぬのではないか。まず、私は今の「当たり前」について考えてみる。学校に行き、友だちと何気ない会話で笑って、部活でバレーボールをして、家族が作ったご飯を食べている。そんな幸せが私の「当たり前」。この「当たり前」が壊れることは想像もつかない。

正直に言うと、戦争はあくまで昔の出来事であり、現代の日本では無縁の話だと考えてしまう。最近では、ウクライナとロシアが戦争を繰り広げているが、現代の日本には関係ないと考えてしまう。こんな考えをしているのはもちろん私だけではなく、戦争を経験していない多くの人もこのような考えを持っているのではないだろうか。戦争は恐ろしく二度と起こってほしくないと願っている。そして、どこか無縁だと考えている私たちもいる。

しかし、そんな「当たり前」は、たった一つの小さな出来事でも一瞬にして壊れてしまう。たとえば一九六九年、エルサルバドルとホンジュラスによるサッカー戦争。サッカーの試合で両国にあった不満がぶつかり合い、戦争に発展した。なんと両国は軍隊を出し、多くの人が犠牲になってしまった。私は目を疑った。身近にあるスポーツまでも戦争のきつかけになってしまふのだ。そんな戦争は今も昔も世界中いろいろなところで起きている。

それでも本当に私たちは戦争に無縁と考えていいのか。私は反対する。今を生きる私たちは、もう一度戦争についてよく学び、考え、これからの社会と「当たり前」をつくらなければならない。今を生きている人は、あまりにも平和な日常が「当たり前」と考えすぎているの

ではないだろうか。第二次世界大戦から八十年。もう一度「当たり前」について考えるべきではないか。

しかし、どのようにしたら私たちは「当たり前」をつくれるのだろうか。私はこう考える。戦争をなくすことは一人では絶対にできない。けれど、些ち細な思いやりや行動、その気持ちを相手に伝えることが大事である。小さなことが積み重なって「当たり前」がつくられるのではないだろうか。今を生きている人が、これからの社会と「当たり前」をつくり続ければ、「当たり前」がいつまでも続く世の中がくると私は信じている。

いまを生きている私

長井崎小中一貫学校 九年

菅野沙苗

一分一秒を無駄にせず

好きなことも やるべきことも

夢へ向かって走る

それは楽しい それでも問う

なぜ生きているのだろう

母と父が私を産んでくれた嬉しい

でも 皆はどうだろう

色々な人がいる

安心できる家族に守られて生まれた人も

そうでない人もいる

戦争で失うものは大きい

私たちは欲しいものは何でも買える

けれど どこかでは今も

つらい暮らしが続く

遊ぶ時間 勉強の時間 家族の団らん

かけがえのない時間が

不安と恐怖に染まる日がある

私は戦場にいない

だから本当の痛みは分からない

見て聞いて それで終わりでいいのか

その場にいらなくても

できることはないのか

人はただ一度の人生を生きる

だから相手を思いやり 気遣い合いたい

人は助け合わなければ生きていけない

今苦しむ人にも手を差し伸べたい
食や医療を届け 子どもたちを救い
話を聞き 笑顔と夢を取り戻したい
この願いが届くまで
協力し合える世界を 私は信じたい

広島を訪れて

原中学校 一年

齋藤 湊斗

一九四五年八月六日午前八時十五分、広島に原子爆弾が投下された。この爆弾で約十四万人の人が亡くなった。この人たちの気持ちは、どのようなだったのだろうか。また、爆弾が落ちてくる瞬間、どんなことをしていたのだろうか。急に爆弾が落ちてきて、夢を叶えられずに亡くなった人もたくさんいるのだろう。僕は、原爆は、ただただ人を苦しめる兵器であって、生きるうえで何も得にならないと思っている。今年の夏、僕は、広島平和記念資料館に行った。そこには、原爆のことや、当時の人々の暮らしの写真や絵が展示されていた。その中には、人々が負った火傷や傷を表したものがたくさんあった。火傷は重傷のものばかりで、背中全体が焼けていたり、中には、全身に火傷を負ったりしている人の写真もあった。僕が特に印象に残ったもの

として、目が落ちてくる人物を描いた絵があった。目がドロドロとたれ落ちているのである。まるで、溶け落ちてくるかのようで、とても気持ち悪く、恐ろしく感じてしまった。

次に、僕は、遺品が展示されているコーナーを回って歩いた。そこには、原爆が落とされるときに乗っていたであろう三輪車や、被爆した生徒の制服が展示されていた。それらは、焼けこげ、形が変わっていた。その中でも、僕が一番つらく感じたものは、一つのお弁当箱だった。その日、いつも通り、母親が作ったお弁当を持って登校したその生徒は、被爆し、楽しみにしていたお弁当を食べることなく亡くなってしまった。お弁当箱は、中身も丸ごと真っ黒にこげていたのだ。その子は、僕と同じ中学生だった。僕は、自分と同世代の人々も原爆に巻き込まれた現実には、ぼうぜんとしてしまい、何も考えられず、固まってしまった。

さらに進むと、人影の石が展示されていた。この石は、銀行の入口の階段に、腰かけていた人が、近距離で原爆が炸裂し、逃げることもできずに、その場で亡くなったものと考えられている。原爆の強い熱線により階段は白っぽくなり、腰かけていたところが影のように黒くなって残ったと記されていた。僕は、これを見て、一瞬で人の命が奪われただけでなく、その姿までも消してしまった原爆の残酷さに恐怖を感じた。ここに座っていた人が誰なのかいまだにわからないのだ。

原爆の恐ろしさは死者が多いことだけではない。生き残った人達も、苦しみの中で生きていた。原爆により頭髪が抜けた姉と弟、親をなくした子ども達などの姿が展示されていた。その中でも、最後に展示さ

戦争と平和について

原中学校 二年

早川 隼

れていた佐々木禎子さんのお話が僕の心に残った。禎子さんは、二歳のときに被爆したが、その後普通に生活を送っていた。しかし、十年後の小学六年生の時に、白血病になり、中学校に通うことができないまま、八ヶ月の入院の末、亡くなった。禎子さんは入院中に、生きたいという願いを込めて、折り鶴を折り続け、その数は千三百羽以上になったと言われている。その折り鶴は、平和の象徴として世界に広まり、語り継がれていると知った。

資料館に行つて、僕が思った以上に原爆が恐ろしいものだということとを学んだ。この経験を生かし、僕は次のことを頑張っていきたいと思う。一つ目は、命を大切にすること。自分の命だけでなく人の命も大切にすることだ。そのためには、助け合つて生きていくことが必要だと思う。二つ目として、夢や目標を持ち、あきらめずに立ち向かうこと。亡くなって夢を叶えることができなかつた人の分まで、生きている僕らが頑張るべきだと思う。三つ目に、受け継ぐこと。今回、親が僕に原爆のことを教えてくれたように、僕もこの思いや知識を次の世代に継承していく。そのことが、平和につながる第一歩だと考える。

私は、国語の授業や読書、映画、ニュースを通して、「戦争と平和」について多くのことを学び、考えるようになりました。今、当たり前のように毎日を生きていけることが、どれほど幸せで、どれほど守らなければならぬことなのかを、少しずつ理解することができるようになりました。

国語の授業で『壁に残された伝言』という文章を読みました。そこには、原子爆弾が落とされた直後の広島で、ある人が誰かに向けて、焼けこげた壁にチョークで伝言を書いたという実話が紹介されています。短い言葉なのに、とても強い思いが込められていて、私は胸が締めつけられるような気持ちになりました。会いたくてももう会えないかもしれない。それでも自分にとって大切な人が生きていることを信じたい。その人の気持ちや思いを、涙が出そうになりました。

この文章から私は、「伝えること」の大切さや、「生きること」の重みを感じました。チョークの文字は、戦争というむごい現実の中で、精いっぱい愛情と希望を伝えようとした証なのだと思います。戦争は、人と人とのつながりを引き裂くだけでなく、言葉すら届けられなくなる状況を生み出してしまふ。だからこそ、今こうして普通に言葉を交

わせる平和な日常は、当たり前ではないのだと思いました。

また、小説『この世界の片隅に』を読んだときも、戦争の怖さと日常の大切さを強く感じました。主人公のすずさんは、戦時中の広島で暮らしていて、食べ物足りなくなったり、爆撃の恐怖におびえながらも絵を描いたり、料理を工夫したりしながら、「毎日を一生懸命」生きていました。どんなに苦しいときでも、小さな楽しみや笑いを忘れずに生きようとするすずさんの姿に、私は強さと優しさを感じました。でもその日常も、戦争によって簡単に奪われてしまいます。爆撃によって家族や友だちが亡くなり、心にも深い傷を負ってしまうのです。「なんでこんなことが起こるのだろう」と私は強く思いました。戦争は特別な場所で起こることではなく、普通に暮らしている人のすぐそばで突然始まり、何の罪も無い人の命や暮らしを壊してしまうことがとても怖いと思いました。

ニュースでも、ウクライナや中東での戦争の様子が毎回のよう映されています。私は、自分と同じくらいの子どもたちが、戦争の中で生活している姿を見て、胸が痛くなりました。ある日突然学校に行けなくなったり、大切な家族と別れたり、爆弾の音におびえたりしながら生きている。私が当たり前にしていることが、できなくなってしまうのです。私は、「自分には何ができるのだろう」と考えました。もちろん、今の私に戦争を止める力はありません。でも、戦争のことを知り、考えることはできます。そして、周りの人を大切にし、争いを無くす行動をとることなら、私にもできると思いました。たとえば、友達との違いをすぐ喧嘩につなげず、話し合っ分り合うこと。人の

気持ちを考えて、優しく接すること。そうした小さなことが、平和な世の中をつくる第一歩だと感じました。

私たちは、戦争を知らない世代です。でも、それは「関係ない」という意味ではなく、むしろ、二度と同じことが起きないように、記憶を引きついでいく責任があるのだと思います。作文を書きながら、私はあらためて、「平和は当たり前ではない」という言葉の意味を噛み始めています。これからも私は、授業や読書、映画、ニュースなどを通して、戦争の歴史や人々の思いを学び続けたいと思います。そして、自分にできることを少しずつ実行しながら、平和な未来をつくる力になっていきたいと思っています。

命と平和の重さ

原中学校 三年

島田 怜奈

私は以前「あの花が咲く丘で、また君と出会えたら。」という小説を読みました。この小説には、現代の高校生が戦時中の日本にタイムスリップし、戦争の時代を生きる若者たちと触れ合ううちに、「生きる」と「命を大切にすること」の意味を少しずつ理解していく姿が描かれています。読み進めるうちに、私も当たり前前に生きることの重みを考えるようになりました。

数日後、私は「火垂るの墓」という映画を見ました。戦争で親を亡くした兄妹が、食べ物や居場所を求めて必死に生きる姿に胸が締めつけられました。空襲で焼け野原になった街をさまよい、わずかな食べ物を分け合いながら生きようとする幼い兄妹。特に、まだ子どもである兄が妹を守ろうと大人のようにふるまう姿には強い衝撃を受けました。しかしその努力もむなしく、最後には兄も命を落とします。その結末を目にしたとき、私は涙が止まりませんでした。

二つの作品に共通して描かれていたのは、「当たり前前の生活」が戦争によって一瞬で壊れてしまう現実です。家族と食卓を囲むこと、夜安心して眠ること。私が普段自然に過ごす日常は、戦争という異常な出来事によってすべて奪われてしまいます。どんなに願っても取り戻せない、かけがえのない時間になってしまうのだと痛感しました。

特に「あの花が咲く丘で、また君と出会えたら。」で、特攻隊員の青年が「本当は死にたくない。でも、家族を守るために行く」と語る場面が印象に残りました。また二十代で未来のあつたはずの青年が、命をかける覚悟を語る姿は立派でありながら、悲しく胸が痛みました。「火垂るの墓」では妹が「おなかすいた」とつぶやく場面が忘れられません。食べ物も水も手に入らず、日に日にやせていく体。幼い子どもが「生きたい」と願いながら力尽きていく姿は、目を背けたくなくなるほどつらいものでした。

私の家族の中には戦争を体験した人はいません。だからこれまで戦争を「遠い昔の出来事」と思っていました。しかし、戦争は決して架空ではなく、数十年前に実際にあった現実だと感じました。戦争で失

われた命の中には、私と同じくらいの年の子どもたちもたくさんいました。もし自分がその時代に生まれていたら、笑顔のない日々を送っていたかもしれない。そう思うと、今の平和な日常のありがたさを改めて考えさせられました。

今の私は朝起きて学校へ行き、帰ってきたら家族と夕ご飯を食べ、夜安心して眠ります。時には「勉強が大変」と思うこともありすが、それすら平和だからこそ感じられる悩みです。もし戦争が起きれば、学校にも行けず、家族と食事をすることもできなくなってしまいます。「あの花が咲く丘で、また君と出会えたら。」の青年も、「火垂るの墓」の兄妹も、本当は普通の生活を望んでいたはずですが、それを許さなかったのが戦争でした。

平和を守るために今の自分に大きなことはできません。けれど、まずは戦争を知ることが大切だと思います。今ある生活に感謝する気持ちを持つことが、平和を大切に知る第一歩です。本や映画で当時の暮らしを知ったり、資料館や展示を訪れたりすることも、私にできる大事な学びです。家族や友達と過ごす時間も、「当たり前」と思わず大切にしていきたいです。

いつか、子どもや孫に「戦争ってなに？」と聞かれたら、「昔は悲しいことがあった。でも、私たちが平和を守ってきたから、今は安心して暮らせる」と胸を張って伝えられる大人になりたいです。そのためには、作品で感じた「平和の尊さ」を忘れず、日々の生活を丁寧に積み重ねることが大切だと思います。

二つの作品は、どちらも悲しくつらい物語でした。しかし同時に、

私の心に「平和の大切さ」を教えてくださいました。命の重さ、人のやさしさ、そして当たり前前の尊さを忘れず、私はこれからも生きていきたいです。そして未来の世代に平和を受け渡せる人になりたいです。

私達にできる平和への第一歩

浮島中学校 一年

杉山 亜美

ある朝、テレビのニュース番組を見てみると「今日は何の日か知ってる？」と兄に聞かれました。「終戦記念日でしょ」と答えると「じゃあ、八月六日は？」私は答えることができませんでした。

八月六日は、一九四五年八月六日広島市に原子爆弾が投下されたことに由来した「広島平和記念日」でした。毎年この日に原爆死没者の慰霊と世界恒久平和の実現を祈った記念式典が開催されます。記念式典で小学生が戦争に関するスピーチをしていたニュースを見たことを思い出しました。私は深く考えずにぼんやりとそのニュースを見ていたんだと恥ずかしくなりました。学校で戦争について学びましたが、教科書で読んだ歴史上の出来事としか思っていなかったのです。

私たちは、毎日たくさんの情報に囲まれて生活しています。ニュースで世界各地の紛争や事件を見たり、SNS上で起きたいろいろな揉め事を見たり聞いたりします。それを多くの人々は、遠い世界の出来

事として受け止めてしまいがちです。しかし、平和な世界を作るのに必要なのは、一人ひとりが平和の大切さについて考えて伝えることではないかと感じました。

私達は戦争のない平和な時代に生まれて育ちました。でも平和とは単に戦争がないことだけではありません。私にとって平和とは、誰もが安心して笑顔で過ごせることです。だから平和になるために伝えることは、日常生活の場面にもあります。友達同士の小さなけんかや言い争いは話し合うことで伝わったり悲しい辛い思いをしている友達を見つけたときは声をかけることで相手に気持ち伝わったりします。普段の小さな行動も平和を伝えることにつながる大切な方法だと思います。一方で、伝えることは気をつけないと問題を大きくしてしまうこともあります。間違った情報や偏った考え方をしていると、相手も傷つけてしまったり、仲を悪くしたりしてしまうことにつながります。正しい知識と正確な情報を知ったうえで、相手の立場になって考えることが必要だと思います。

先日、学校で「祈りの折り鶴」という戦争についての紙芝居を見ました。広島原子爆弾投下で被爆して白血病になり、十二歳で亡くなった女の子のお話でした。女の子が折った鶴の写真も見せてもらいました。その話が作られた物語ではなく、実際に起きた出来事だとわかり、ぎゅっと胸が締め付けられました。同じ歳の女の子がこんな思いをしていたなんて信じられません。もっと戦争を直接経験した方や家族に当時の話を聞いてみたいと思い、祖父母に相談してみました。親せきや近所の人に戦争を経験した方は見つかりませんでした。

「戦争を経験した方は高齢になっていて、直接話を聞くことはとても貴重なことになってきているんだよ。だからこそ、戦争についての話を受け継いでいくことはとても重要で、身近に起きた出来事だという感覚を失ってはいけないよ。」

と祖母が私に話をしてくれました。戦争についての本や資料をもっと見てみたいと思いました。

戦争は遠い昔の出来事ではなく、今でも争いをしている国があり、多くの人が命を落としています。日本も平和を守る気持ちをなくしてしまつたら、再び戦争が起こってしまうかもしれません。私たちにできることは小さいことしかありません。誰かの気持ちを考えて行動する、人を傷つけることを言わない、戦争の歴史を学んでしっかり伝えていく。そういった小さな一つ一つの行動が、平和につながる第一歩になると信じています。

つな 繋がれた命

浮島中学校 一年

鈴木 心 陽

今から八十年前、一九四五年は日本が終戦した年です。メディア等でも戦争のことについて報じられています。私たちが世代は戦争を経験したことはありません。そのため、どんな出来事があったのかは詳

しくわかりません。出来事を知り、どのようなことを想って生きれば良いのかを深く考えるために二人の曾祖母に話を聞きました。

一人目の曾祖母は小学二年生の時戦争が始まり、六年生の八月に終戦したと言っていました。当時はとにかくものがなかったと話していました。食べ物があれば鉛筆・消しゴムもなく、消しゴムは自転車のタイヤで代用していたそうです。学校では戦いの練習をするなど、勉強どころではなかったと話していました。学校に持っていくお弁当は麦飯やさつまいも、嵩かさを増やすために里芋をサイコロ状にして塩をふつたものを食べていたそうです。当時白米はとても貴重なもので、白米を学校に持っていくと先生に怒られたと話していました。曾祖母の家は百姓だったので少しは食料があったのですが、お腹が満たされたことはなかったと言っていました。また、教科書はありましたが、プリント・参考書はなく試験勉強の際は、教科書を見るか黒板を写して勉強をしていたそうです。そして学校に行くと飛行機の燃料にするお茶の実を拾ってくるように指示されたり、馬の餌にするため畑に落ちていくくずを拾ってくるよう言われたり、ひたすら拾っていたと話していました。

ある夜、雨が降っていると思っていたら実は灯油をまいておりそこに爆弾を落とし、見渡す限りまる焼けになってしまったと悲しそうに話していました。戦争で勝つためなら残酷なことであっても実行するという考えだったのでないでしょうか。経験した方々には私には想像できないくらい怖いことだったと思います。そして、曾祖母が一番怖かった出来事は空襲であると話します。空襲警報が鳴ると夢中になっ

て防空壕に逃げたそうです。防空壕から外の様子をのぞくと東の空が真っ赤だったと話し、そのときは怖かったと言っていました。終戦後は現在の考えに変わり、戦争の教育が書かれた本は墨で黒く消されていたようです。曾祖母は「戦争なんて絶対やってはいけない、平和が一番、平和を願います」と言って話を終えました。

二人目の曾祖母は当時小学六年生で終戦まで浜松へ疎開していたそうです。疎開先の学校に通い、いも飯やかぼちゃを食べていたくらいで食べ物が多かったと話しました。また夜、空襲警報が鳴ると、電気に黒い布を被せて明かりをもらさぬようにしていたといいます。空にはB-29という飛行機が飛んでおり、そこには焼夷弾という爆弾が積まれていたそうです。大きな音をたて落とされた静岡のまちは真っ赤に見えて、焼け野原になったと話します。

私の曾祖父は海軍少年飛行兵として、予科練に所属していたそうです。曾祖父の親は反対しましたが「お国のために」という愛国心の気持ちから志願して行ったといえます。厳しい訓練を受けた曾祖父は戦争が長引いていたら特攻隊員として命を落としていたかもしれない、と話す曾祖母の声色は暗くなりました。心の奥底には怖いという感情があったと思いますが、曾祖父のように日本を守りたいという気持ち、お国のために訓練をしたいという人は当時少なくはなかったのではないのでしょうか。曾祖母は「戦争はただの殺し合いだ。でも、偉い人が決めたからしょうがない。だからこそ選挙に行くのは大切。」と言っていました。それを聞いて、私は重要なことを決める政治家を選ぶために選挙に行く責任があるのだと強く思いました。

今は制度が整えられ、戦争が起こることはないと思いたい。曾祖母も言っていたように、人の命を奪う戦争は絶対にあってはならないことだと思えます。現在は、戦争を伝えていく人が減ってきています。だからこそ話を聞いたり、メディア等で見たりにして出来事を知り、苦しい状況にも立ち向かい、乗り越え、命を繋いでくださった方々に感謝して今を生きていくことが大切だと思っています。

争いを生まないために

門池中学校 二年

小林 暖 稀

今年には戦後八十年の年です。日本は、第二次世界大戦や太平洋戦争でアメリカ率いる連合国軍に敗戦し、戦後はアメリカ主導で復興を遂げて、戦争のない八十年間を築いてきました。

昨年の冬、僕は母と祖母と三人で広島旅行に行きました。僕は歴史にとっても興味があるため、原爆ドームと平和記念資料館を訪れました。原爆ドームはもともと煉瓦造りの三階建ての建物で中央の階段は五階建て、その上に楕円形のドームが載った美しい建物だったそうです。しかし、爆心地から僅か百六十メートルだったため、爆風と熱線で焼かれ、一瞬のうちに崩れ落ちたといえます。その後何度も修復が行われ、ほぼ被爆当時の姿のまま核兵器の惨禍を伝え続けています。この

保存をめぐることは、決定に至るまで長い年月がかかったといえます。それは、原爆ドームが被爆の悲惨な思い出につながるとして取り壊しを求める声があったからです。東日本大震災の遺構保存が議論されたのと同じだと思います。保存が決定されたときには昭和四十一年になっていったそうです。

平和記念資料館には、原爆で亡くなった人たちの遺品がたくさん展示されていました。中には、亡くなった持ち主の名前が書かれた物もあり、なんだかとても怖くなりました。僕の祖母は戦中に生まれて沼津に住んでいました。祖母は資料館へ行ったとき、こう言いました。

「アメリカ人はなぜここに来るんだ。」

たしかに、原爆を落としたアメリカが来るべきではないとも思いましたが、原爆を落とした国の人だからこそ、日本の国や国民が原爆によってどんなに酷い目に遭ったのかを知ってほしいとも感じました。

第二次大戦中の日本は、帝国主義を掲げる天皇中心の国家でした。そして、多くの国が領土を広げるため隣国に侵攻していました。僕は、(世界中が欲望に支配されていたのだな。)

と思いました。今はこうやって考察することも意見を述べることもできますが、戦時中は天皇や軍の命令に従うしかありません。欲望に支配された権力者によって、国民は奴隷のように従軍や労働を強いられていました。その結果、三百万人を超える日本人が命を奪われました。そのうち八万人近くが民間人です。僕は、

(なぜ、権力者ではなく民間人が殺されなければならなかったのだらう。)

と疑問に思いました。戦争を指示したのは民間人ではありません。軍や国家の権力者です。なぜこれだけ多くの民間人が命を絶たれたのか、本当に意味がわかりません。

この夏休みは、テレビでも戦争を扱った番組が多く放送されました。僕が見た映画の中では、逃げ出そうとした特攻隊員を「卑怯だ、非国民だ」と非難し連れ戻そうとするシーンがありました。逃げ出そうとした隊員は、軍人としてのプライドより愛する人との生活を大切にしたいからです。また、別の映画では、親を失って親戚の家に身を寄せた幼い兄弟がその親戚から追い出されるシーンがありました。誰もが生きていくことに必死だったのです。戦争はそうやって、当たり前な優しさや助け合いを人間から奪いました。

今も世界各地で戦争や紛争が起っています。僕は、欲望に負けずお互いの文化や考え方を尊重することが大切だと思います。こんな悲惨な歴史を二度と繰り返さないように、各国が交流を深め、協力しながら問題に向き合わなければなりません。唯一の被爆国である日本は、八十年間戦争を放棄してきました。そんな国の一人として、争いを生まないためにできることをこれからも考え続けていきたいと僕は思います。

平和な未来

門池中学校 二年

山下 凜花

一九四五年八月六日、九日。広島と長崎に原爆が投下されてから、今年で八十年が経ちました。正直いって、私は原爆について、大きな爆発音と強い光が発せられ、あまりにもたくさん死傷者が出たことくらいしか思い浮かびませんでした。しかし、今年広島と長崎の平和祈念式の様子や、太平洋戦争当時の映像がテレビで多く流され、考えさせられる機会がありました。その中でも、私が印象に残っているのは、広島の小六生が平和祈念式で読んだ「平和への誓い」の文章です。

『この広島に人類初の原子爆弾が投下され、一瞬にして当たり前の日常が消えました。』

『一発の原子爆弾は、多くの命を奪い、人々の人生を変えたのです。』
私は、原爆について調べずにはいられなくなりました。

原爆が投下された理由はいくつかあるようです。第二次世界大戦を早期に終結させるためだった、アメリカが原爆の威力を試すためだった、そして、戦後の世界における主導権を握るためだった、などと言われています。どれも身勝手に、自分の都合や欲望にまみれた理由のように思えます。

また、爆風は、爆心地から百メートルの地点では秒速二百八十メートル、一キロ離れた地点でも秒速百七十メートルにもなったそうです。台風最大の風速が八十メートル程だということを考えれば、破壊力は凄まじかったでしょう。さらに、熱線（原爆爆発時に発生する強烈な熱のこと）は、爆発点では百万度を超え、爆心地で三千〜四千℃、三・五キロ離れた地点でも素肌が出ている部分は火傷を負うほどだったそうです。そして、原子爆弾の最大の特徴は、通常の爆弾では発生しない大量の放射線が放出され、それが人体に深刻な障害を及ぼしたことです。被爆者はもちろんですが、外傷が全くなく無傷と思われた人たちが、救護活動や家族の捜索などで爆発の数日後に広島・長崎に入ってきた人にまで甚大な障害を引き起こしました。一九四五年末の時点で、両市合わせて二十一万人の人が亡くなったそうです。今まで知らなかった被害の大きさに、私は衝撃を受け、恐ろしくなりました。そして、今まで調べてこなかったことを申し訳なく感じました。

さきほど挙げた「平和への誓い」には、戦後八十年の今年、こんな文章がありました。

『被爆から八十年が経つ今、本当は辛くて、思い出したいくない記憶を伝えてくださる被爆者の方々から、直接話を聞く機会は少なくなっています。』

被爆者の高齢化が進み、平均年齢は八十歳を超えています。そのため、被爆体験を次世代に継承していくための取組を強化する必要があります。八十年前に、多くの人が犠牲になる出来事があったこと、戦争がなければこんな苦しみはなかったこと、原爆がどんなに残

酷で惨いものだったかということ。これらをもっと多くの人が知り、次世代に伝え、二度と同じ過ちを繰り返さないために考え続けていくことが、「平和」につながるのだと思います。広島・長崎以外に住んでいると、修学旅行や教科書での学習でしか触れることがありません、語り部の皆さんから聞けるうちに聞いておきたい、そう思いました。直接聞けなくても、今ある技術を駆使して、例えば、話している姿を動画で撮影して投稿したり、リモートで被爆者とながったりすることができます。AIを「平和」のために使えばいいのです。

今この瞬間も、世界の各地で戦火が広がっています。世界中の誰もが、もっと危機感を持って本気で「平和」を願い、行動していかなければなりません。平和な未来は自分たちの手でつくるもの、私はそう思います。

戦争のない世界へ

門池中学校 三年

芳賀遥介

今年もまた、夏がやってきました。僕たちにとって、夏休みは楽しい思い出とともに、決して忘れてはならない過去を心に刻み、思い起こすときでもあります。その過去とは、戦争、そして特に八月六日に広島、八月九日に長崎に落とされた原子爆弾です。二〇二五年の今年

は、広島と長崎に原子爆弾が投下されてから八十年という大きな節目の年です。僕はニュースで広島島の平和記念式典の様子を見たとき、世界から多くの人がこの式典に集まり、黙祷を捧げている姿に胸を締め付けられました。広島、長崎の二つの原爆では数十万人の命が奪われ、今もなお家族を失った悲しみや、後遺症に苦しむ人がいるそうです。この八十年という月日は、戦争を体験した方々の声が少しずつ聞けなくなっていく現実も意味します。被爆者の平均年齢が八十歳を超えた今、僕たち若い世代が、記憶や記録を語り継いでいく取り組みや努力に大きな意味があると思います。

僕はこの夏休みに、母と戦争について話しました。その中で、母から祖父の戦争体験を聞くことができました。まだ祖父が四、五歳だったころ、夜に空襲があり、家族で慌てて家の外に飛び出したら周りはお川の海だったそうです。祖父たちが爆撃と周囲の炎から逃げるため近くの川に飛び込んだところ、その川は炎の熱で熱湯のようだったそうです。川の水が熱いなんてことは想像もできません。母も子供のころ祖父からその話を聞き、衝撃を受け、ずっと忘れられなかったそうです。祖父から母へ、母から僕へ伝えてくれたこの体験を、僕もずっと忘れずに伝えていきたいと思います。

そして、なぜ世界中で過去にこれだけ辛い体験をしても、人々は戦争を起こしてしまい、今も各地で続いているのだろう、と僕は戦争のニュースを見るたびに考えます。戦争にも種類があり、国同士の戦争や、一つの国の中で異なる勢力が戦う内戦、宗教が絡んだ戦争など様々です。しかし、どの戦争にも共通して言えることは、自分の正義を相

手に押し付けていることだと思えます。その押し付け合いがエスカレーターとして、武力で解決しようとするから戦争は起きてしまいます。しかし、それで被害を受けるのは罪のない一般人なのです。

戦争をなくしたり終わらせたりするためには、相手の気持ちや意見を尊重して受け入れる心を、互いに持たなければなりません。しかし、それをすぐに実現させることは簡単ではありません。まず一人ひとりが互いに受け入れる心を持ち、それを広げていくことの積み重ねでしか成し遂げることはできないのではないでしょうか。

戦争で犠牲になった人たちのためにも、その記憶や思いを絶やさないように、僕たちが、日頃から世界情勢に目を向けたり、戦争について学んだことを次の世代に伝えたりすることで、戦争に対する意識を高め、相手を尊重し、受け入れる心を持つことで戦争のない世界への一歩を踏み出せることを願っています。

平和とは

今沢中学校 一年

鬼塚 心

私は作文を書くに当たって「平和」とは何かを考えてみました。「平和」とは、争いや戦争がないこと。差別をせず、互いを認め合うこと。人の悪口を言ったり喧嘩けんかしたりせず、皆が仲良く笑顔でいられること。

考えてみると、私の身近にも沢山の「平和」があります。

私は戦争を体験したことがありません。テレビのニュースや、戦争の映画や本、戦争を経験した人からの話でしか戦争を知ることができません。

私の祖父は戦争を体験した一人です。祖父が生まれた場所は東京で、太平洋戦争中でした。東京も空襲を受けるため、祖父は安全な奈良へ疎開し、曾祖父は戦争へ行きました。疎開先で曾祖父の無事を祈りながら、戦争の恐怖に怯おそえて生活をしていたそうです。そこで食べていたものは主に野菜で、主に芋類を多く食べていたそうです。そのため、祖父は年月を重ねても芋が嫌いでした。疎開先の山の中でも飛行機や爆弾の音が聞こえ、とても怖かったと幼い私に教えてくれたことを、今でも鮮明に覚えています。もし今の時代に戦争が起きてしまったら、父や兄が戦争へ行き、私は安全な場所へ疎開し離ればなれになってしまう、それだけではなく父や兄が死んでしまうかもしれないと思うと胸が苦しくなります。

戦争の中を生き抜いてきた人たちは、先の見えない不安を抱えどんな気持ちでいたのでしょうか。

現在、私たちが平和に暮らしている中でも戦争が起きています。ニュースなどでロシアとウクライナの戦争を知りました。ロシアからの攻撃を受けてしまっているウクライナの都市はミサイルで破壊され、沢山の人が犠牲になってしまっています。犠牲者の中には子どももいて、多くの国民が難民となり国境を越えて他国に避難せざるを得なくなっています。目の前で亡くなっていく大切な人。どんどん壊れ

ていく大切な場所。きっと怖くてたまらずぼろぼろな精神状態のはずです。なぜ自分たちだけがこんなに辛い思いをしなければいけないのだろうかと思っただけでしょう。この戦争に勝つことで何が得られるのでしょうか。勝敗が決まったら何事もなく、平和になるのでしょうか。人が死ぬ事と引き換えに平和を手に入れてもそれは本当の幸せではないと私は思います。

小学校の頃、戦争についての授業があり、シリアの戦争映像を見ました。その内容は三歳の娘が爆撃で怯<おそ>えてしまっているため、父親が「空襲音は楽しい音」「音が聞こえたら笑おう」とゲーム感覚で教えているものでした。子どもが笑えば笑うほど切ない気持ちになりました。またその子が大きくなったらと考えると心が痛みました。空襲音ではなく、もっと楽しい音で笑える世界になってほしいと思いました。

私は戦争について考えることがあります。国の領土を広げるために人と人が争い、沢山の尊い命を奪ってしまうなど、多くの人にトラウマを与えます。「戦争」で武器などを使い、暴力的に勝敗を決めるのではなく、対話や交渉などで解決できなかつたのでしょうか。

今、戦争が起きてしまっている国も、いつか争いが終わり、穏やかで平和な日が来る事を願います。

私も、祖父が疎開してくれたおかげで今の私はいること、命をつないでくれた祖父に感謝の気持ちをおかずにいたいと思っていました。そして、私の身近にある「平和」を当たり前と思わず、一つ一つの幸せを感じながら日々の生活を過ごしていきたいです。

あの空の下で生きた証

今沢中学校 三年

三木穂波

焼けた空、泣き叫ぶ声、そして消えた未来

戦争は、遠い昔の出来事で、教科書の中にしか存在しないものだと思っていた。自分とは無関係の過去の話だと。

だが、九十八歳になる曾祖母が戦争を生き抜いた話をしてくれたことで、その考えは大きく変わった。

「戦争のときは、たべるものがほとんどなくてね。毎日お腹が空いて辛かった。子供も大人も生きるために必死だったんだよ。」

この話を聞いたとき、戦争はただ爆弾が落ちるだけではなく、日常生活の中で生きることそのものを苦しみに変えてしまうものだったのだと気づいた。

授業では、第一次世界大戦と第二次世界大戦について学んだ。しかし、教科書の中の出来事は静かすぎて、本当の重みを感じられなかった。ただ知識として頭に入るだけで、それがどれほど残酷で、人々の命を奪ったかまでは想像ができなかった。

そんなときに出会ったのが、『火垂るの墓』だった。大空襲の後、戦争の中で必死に生きようとする幼い兄妹の姿。焼けた空の下で泣き叫ぶ声、焦げた街、飢えに苦しむ人々。すべてがあまりにもリアルで、

胸が締めつけられた。戦争の悲惨さがようやくやく心に迫ってきた。

そのとき、曾祖母が話した言葉を思い出した。曾祖母は被爆はしていないが、食糧不足の中で生き抜く苦しさを何度も話してくれた。「おにぎり一つに涙を流して感謝をした。」とのことだった。戦争中は、米が特に貴重でおにぎり一つの価値は非常に高かったのだ。その言葉から、戦争は戦場だけでなく、遠く離れた場所でも人々の心と生活を壊していったことが伝わってきた。

今の時代を生きる私たちは、戦争の影響を感じることは少ないかもしれないが、それでも戦争がもたらす恐ろしさは忘れてはならない。

曾祖母の言葉は、私にとって単なる思い出ではなく、今を生きる力を与えてくれるものだ。戦争を生き抜いた人たちが伝える思いを、無駄にはいけないと感じる。

私たちができることは、平和を守るために過去の出来事を学び、それを元に未来を築いていくことだ。そのためには、戦争が人々の命や生活にどれほどの影響を与えたのかをしっかりと理解し、その重要な教訓を次の世代に伝えていくことが不可欠だと感じる。

戦争は数え切れない命を奪い、未来さえも焼き尽くしてしまった。それでも生き抜いた人たちがいる。その人たちが語る言葉や、どんな困難でも希望を捨てずに生きようとした姿勢こそが、私達に平和の尊さを教えてくれる「生きた証」だと思う。

今を生きる私たちに求められているのは、あの時代の声を忘れずに受け止め、未来のためにその教訓を活かすことだと思う。

曾祖母の言葉と『火垂るの墓』の兄妹の姿は、きっと私の中で生き

続けていく。

焼けた空の下で消えた命の声を私は決して忘れない。

戦争の影響を感じるものが少ない時代に生きているからこそ、私は学び、伝え、考え続ける。それが私の「生きた証」になるように。

核兵器のない未来を願い、誰もがおそれることなく安心して暮らせる平和な世界を私は心から望んでいる。

未来への一歩

今沢中学校 三年

深澤輝一

夏休み前、私は社会の授業で、第二次世界大戦で人が殺される瞬間を映した辛い映像を見ました。その映像はとても残酷で私は言葉を失い、自分の胸が痛むのをはっきりと感じました。そのとき私は、「今こうして幸せに生きている」ということが、どれほど尊いことかを実感しました。幸せというものは何も特別なことがなくても家族と一緒に夕飯を食べたり、友達とふざけて笑い合ったり、そんな何でもない瞬間が実は一番大切だと気づきました。しかし、この幸せを私は普段、当たり前のように感じていました。悲惨な映像をみるまでは、それに感謝することなんてなかったのです。

「歴史はくり返す」とは、哲学者カール・マルクスの言葉です。歴史

の中で何度も戦争は繰り返されてきました。最初の戦争は古代エジプトのカデシユの戦いと言われ、それから幾度となく戦争は続き、そして今、ロシアとウクライナの戦争やイスラエルとパレスチナの戦争などが続いています。私が心に強く残ったのは、戦争がどれほど多くの人の命を、生活を、奪ったのか、そして無実の人々がどれほど悲惨な目にあっただのかという事実です。その苦しみや絶望は目に見えないところで今も続いているのかもしれませんが。なぜこんな悲劇が繰り返されるのか。その理由の一つに「無知」があると思います。わたしたちが知らないこと、見て見ぬふりをするのが戦争を生み出していると思ふのです。

現代ではAIが私たちの生活においてあらゆる場面で浸透しています。科学の進歩は生活を豊かにしてくれる反面、その強大な力が間違った形で使われているという現実には衝撃を受けました。実際、昨今の様々な戦争にはAIが戦争の道具として用いられていることに私は深い恐怖を感じました。そこでAIに「あなたが戦争の道具としてつかわれていることをどう思う？」と尋ねてみました。するとAIは「私は中立であり、善悪は人間の使い方が決まる」と答えました。この言葉に私ははっとしました。技術には善悪はない。ただAIを使う人間がその力をどう使うかが未来を決めるのだと。

史上最悪と言われた第二次世界大戦では、たった数人が戦争を決定していたことを知りました。この数人の選択が何百万もの人の人生を狂わせてしまったのです。もしも、その数人が、

「これ以上戦争はやめよう」

と決断できていたなら、今の時代に、生きていた人がたくさんいたかもしれないのです。ただ、これはあくまでも仮定の話です。しかし、この仮定が過去から教訓を得て、未来をいきるために必要だと思いません。

では、具体的に私たちができることは何でしょうか。日々の幸せを守り、平和を実現するために、まず私達ができることは「知ること」です。例えば募金をする前に、そのお金がどこに使われ、どんな人が募金を必要としているのかを知り、募金をする意味を理解することはとても重要だと考えます。しかし、知ることだけでは足りません。次に私たちは、知ったことを活かし、実際に行動を起こさなければなりません。私たち一人一人が「今」を見て見ぬふりをせず、「知ること」「行動をおこすこと」が、私たちが今、すべきことだと思います。

平和はどこか遠くの場所にあるわけでも、誰かが実現してくれるわけでもありません。あなたが踏み出したその一歩が、未来を作っていきます。今が「動くとき」です。

同志少女よ、敵を撃て

市立高中等部 二年

原 蒼 志

逢坂冬馬さんの小説『同志少女よ、敵を撃て』を読んで、僕は戦争の悲惨さと、「真の敵」とは何かについて深く考えさせられました。物語は、第二次世界大戦中のソビエト連邦を舞台に、戦争によって家族を殺され故郷を失った少女セラフィマが、復讐心を胸に狙撃兵として戦争の最前線に立ち、成長しながら戦争ばかりの世の中に疑問を抱き、「真の敵」と向き合っていく姿を描いています。

フィクションでありながら、背景は実際の歴史に基づいていて、戦場の地獄のような現実が、読者の心に強く迫ってきます。僕は、戦争とは単に兵士同士が武器を持って戦うだけのものではないと感じました。戦場で人々の心が壊れていく過程、信じていた仲間を失い、憎しみだけを頼りに生き延びようとする姿に胸を打たれました。作中で語られる「真の敵」とは、ドイツ兵やナチスの思想ではなく、戦争という非人間的な構造、そして「復讐心」や「憎しみ」、国家の命令に従ってしまう「自分の弱さ」です。この考えに、私は共感すると同時に恐怖すら覚えました。なぜなら、それは私たちの社会にもあり得る問題だからです。日本では、戦争とまではいかずとも、他国と揉めていることは多々あるし、世界に目を向ければ、ウクライナや中東、アフリ

カなどで争いは絶えず、今も多くの人々が「正義」と「敵」の名のもとに命を奪われ、また命を奪っています。

こうした戦争は、複雑な歴史や宗教、民族、経済的背景によって引き起こされ、「お前の敵はあの国だ」と言われれば、人々は簡単に信じってしまうのです。それは、国家の命令に従いながら「自分で考えること」を忘れていたセラフィマの姿と重なります。そして僕たち日本人は、この問題を他人事にはいけません。日本は世界で唯一の戦争被爆国です。広島・長崎に落とされた原子爆弾は、一瞬にして何十万人もの命を奪い、生き残った人々にも深い傷を残しました。その傷や苦しみは八十年たった今もまだ残っています。日本は戦争によって加害者にも被害者にもなった国です。だからこそ、僕たちは戦争の本質を語り継ぎ、戦争の前触れに敏感でなければならぬと思います。

セラフィマは、母を殺した敵への憎しみから銃を取りますが、次第に「復讐の連鎖が終わらない世界」に疑問を抱くようになります。その姿は、家も故郷も、家族、仲間をも失った、「誰も自分と同じ目に遭ってほしくない」と語る被爆者の証言と重なります。復讐は次の戦争の火種となります。憎しみの連鎖を断ち切るには、その感情に支配されない心の強さが必要です。日本は、先人たちが、復讐の道ではなく、核兵器廃絶の道を歩んでくれたから、今僕達が平和でいられるのだと感じます。今、日本では「平和の大切さ」が当たり前のように語られています。憲法第九条の意味、核兵器禁止条約、自衛隊の役割など、平和を守るために僕たちはもつと真剣に考えるべきだと思います。この小

説を通じて僕は、戦争は過去の出来事ではなく、僕たちの中にある感情や無関心からでも始まりうるものだと知りました。「真の敵」とは、外にいる誰かではなく、自分の心の中にある自分の弱さや、甘え、欲望なのかもしれません。だからこそ、日本は唯一の被爆国として、戦争を止めるための言葉を発信し続ける責任があるし、僕たち若い世代も、その役目を受け継ぐ覚悟を持たなければならぬと強く感じました。僕も、自分の中にある真の敵と戦っていきたいです。そんな気づきを与えてくれたこの本に、感謝したいです。

あらためて平和とは

市立高中等部 二年

高草木 凛

毎年八月になると、戦争や平和について考える機会が増えます。テレビでは広島や長崎の原爆の日のニュースが流れ、当時の状況などを見ると悲惨で胸がキュツとなります。けれども、普段の生活では「平和」についてあまり意識していない自分がいます。そんなとき、ある出来事をきっかけに、私は平和とは何かを深く考えるようになりました。

私たちは今、当たり前のように安全な生活を送っています。毎日学校に通い、友達と話し、ご飯を食べて、夜は家族と一緒に眠る。そん

な何気ない日々は、とても大切に幸せなものです。しかし、その「当たり前」は、実はとても特別で、かけがえのないことなのだと気づかされました。

私は昨年の夏、家族と一緒に広島を訪れました。原爆ドームや平和記念資料館を見学する中で、私は今までに感じたことのない衝撃と心の揺れを感じました。資料館の中には、戦争や原爆によって命を奪われた人々の遺品や証言が展示されており、一つ一つに深い悲しみが込められていました。まず目に入ったのは、ぼろぼろになった学生服と、それに添えられていた「母に会いたい」と書かれた少女の日記です。自分と同じくらいの年の子が、突然すべてを失ってしまったという現実が、胸に重くのしかかりました。中でも、焼けただれた服を着た少女の写真を見たとき、私は言葉を失いテレビで見るとも生々しく見ていられませんでした。写真の中の子どもたちが、自分と同じくらいの年齢の子ばかりで、「もし自分が、家族が、その時代に生きていたら」と思うと、とてもゾツとし他人事とは思えませんでした。

それまで私は、戦争についてアニメ・ドラマ・絵本の世界としか考えていませんでした。しかし、実際にその場所に立ち、当時の様子に触れることで、私は初めて戦争の恐ろしさや平和の尊さを自分ごととして深く感じました。平和は、ただ戦争がないことではなく、人が人を思いやり、尊重し合え、安全で豊かな社会のことだと私は思います。

しかし、今の世界を見ると、まだ多くの場所で戦争や争いが続いています。ニュースでは、ウクライナや中東などで起きている戦争の映像が流れ、人々が避難したり、家族を失ったりしている姿を見る

たびに、胸が痛くなります。私たちが平和に暮らしている間にも、世界のどこかでは苦しんでいる人がいる。戦争は、誰か一人の問題ではなく、社会全体の問題です。そして、戦争が起ると、子どもも大人も関係なく、大切な命が失われてしまいます。私たちが今こうして安心して生活できているのは、過去に多くの人が犠牲になり、平和を願って努力してきたからです。その事実を、私は忘れてはいけなと思います。

平和を守るために、自分には何ができるのだろうと考えたとき、小学生の頃に読み聞かせに来てくれた人の言葉を思い出しました。その人は戦争を経験した方で、お話の最後にこう言いました。「戦争は国と国との奪い合い。でも、まずは身近な争いをなくすことが、戦争を減らす第一歩なんだよ。」当時の私は、その言葉の意味をよく理解できていませんでした。けれども、昨年広島を訪れて、原爆ドームや平和記念資料館で戦争の悲惨さにふれたことで、その言葉の重みを改めて感じました。そして、「自分にもできることを行動に移そう」と強く思うようになりました。

私は、世界中の人たちが笑顔で安心して暮らせる平和な世界を心から願っています。

戦争のない未来をつくるために、自分にできることを少しずつ実践しながら、これからも平和について考え続けたいです。そして、その思いを周りの人たちにも伝え、みんなと一緒に、争いのない社会を目指す行動していきたいと思います。

平和とは何か

市立高中等部 三年

小林 祐輝

私達の暮らす日本は、戦争のない平和な国と言われている。毎日学校に通い、友達と笑い合い、家族と食卓を囲む。こうした日常は当たり前のように感じられるが、世界に目を向ければ、それがどれほど貴重なことであるかを実感させられる。

ニュースを見ると、戦争や紛争、テロなどの問題が、今も世界のどこかで続いていることがわかる。爆撃によって家を失った人々、学校に通えずに避難生活を送る子どもたち、家族と引き離されたまま過ごす人も多い。こうした現実を目にするたびに、私が普段過ごしている何気ない毎日が、実はとても恵まれているということに気付かされる。

わたしが「平和」について初めて真剣に考えるようになったのは、中学三年生の平和学習がきっかけだった。授業では、第二次世界大戦や広島、長崎の原爆投下について学んだ。

当時の写真や記録映像には、言葉を失うような光景が映し出されていた。がれきの中に立ち尽くす子ども、焼け落ちた町、泣き叫ぶ人々、それらは決して昔話ではなく、現実にあった出来事だ。もしも自分がその時代に生きていたらと想像すると、今の平和な暮らしがどれほど

大切なものであるかがより強く感じられた。

平和とは単に「戦争がないこと」だけではないと私は思う。争いがなくても、差別や貧困、いじめ、孤独といった問題があれば、それは本来の意味で平和とは言えない。安心して暮らせる環境、誰もが大切にされる社会、思いやりのある人間関係、こうしたものがあってこそ、心からの平和が実現するのだと思う。

では、私たち一人ひとりに何ができるのだろうか。国の大きな問題をすぐに解決することは難しいかもしれない。しかし、身近なところにこそ、平和を守るヒントがあるのでないかと思う。たとえば、友人と意見が食い違ったときに、相手の話を最後まで聞こうとする姿勢、困っている人を見かけたときに声をかける勇氣、違う文化や考え方を知ろうとする好奇心、こうした小さな行動の積み重ねが、やがて社会全体の平和につながっていくのではないだろうか。

また、私たちは過去の出来事から学び、未来に生かす責任がある。戦争の悲惨さや人々の苦しみを知り、それを忘れずに語り継ぐことも、平和を守る大切な一歩だ。近年では、被爆体験を語る人々の数も少なくなってきた。その分、若い世代である私たちが学び考え、発信していくことが求められているのだと感じる。

今の私たちにできることは限られているかもしれない。けれど、自分のまわりの人を大切にすること、人の痛みに共感すること、違いを受け入れること、そうした意識を日々持ち続けることが平和を守ることにつながると信じている。

平和は、誰かが与えてくれるものではなく、私たち一人ひとりです

くり出していくものだ。争いのない世界、安心して暮らせる社会を実現するために、私はこれからも「平和とは何か」を考えながら、自分の行動を見つめ直していきたい。そして、将来の社会を担う一人として、今のこの平和を次の世代へと引き継いでいけるよう努力していきたいと思う。

身近な幸せについて

市立高中等部 三年

渡 邊 伊 織

私の曾祖母は戦争を生き抜いた一人です。曾祖母の話からは、戦争の辛さや苦しさと共に現代の幸せに感謝する気持ちが伝わってきます。曾祖母が語ってくれた戦争当時の話を聞いて、平和の大切さについて深く考えさせられました。

曾祖母が生きた時代は学校に行くことすらできず、家族を支えるため畑仕事などの手伝いをしていました。その合間に空襲警報が鳴り響くこともあったそうです。子供達が空襲警報が鳴り響いている状況下でも畑仕事をしているという光景は、今の時代では考えられない状況で、想像すらできません。その上、家族は戦地へ行ったり、工場へ働きに行ったりしていたため、曾祖母は一人で逃げることもあったといいます。近くの山へ避難し、一人で心細い中、耐え忍んでいた

のです。

戦争という恐ろしい現実の中で曾祖母は生き抜く力を持ち続けました。

その一方で、曾祖母は今の平和な時代に対して強い感謝の思いを抱いていました。「今の時代はとても幸せな時代になった。十分に食べ物が手に入り、いつ鳴るかかわからない空襲警報に怯おそえなくてよく、安心して暮らしていける。」と言って喜んでいました。特に、今の私たちは義務教育を受けることができ、勉強する機会を与えられ、十分に勉強できることに感謝すべきだと教えてくれました。曾祖母は私たちに「しっかりと勉強して親孝行ができるようにしなさい。」と言いました。その言葉は、自身が戦争を乗り越え、私たちには想像しきれない苦勞をしたからこそ、出た言葉だと感じます。

私が曾祖母の話聞いて最も強く感じ、考えたことは今ある身近な幸せを大切にしなければならぬということです。現代では技術の向上が進み、日々の生活の中で便利なものが沢山あり、何不自由なく暮らしています。曾祖母が生きた時代と比べると、私たちはとても恵まれた環境の中で生きています。例えば、学校に通えること、自由に出し買い物ができること、スマートフォンなどを使用し家族とすぐに連絡が取れることなど、今の時代はこれらのことが当たり前のようになっています。しかし、戦争などで常に命の危険に晒さらされていた人たちにとって、このような平穏な日常は夢のようなことだと思います。

また、曾祖母の話からは「戦争をなくす」や「核兵器をなくす」などの大きな目標を掲げる前に、身近な幸せに気づくことだと感じまし

た。私たちが幸せを願うのなら、まずは自分たちの周りにある小さな幸せを大切にし、感謝の気持ちを持つことが重要だと思います。例えば、家族と過ごせる時間を大切にすること、困っている人を助けること、自分自身が平和な心を持って人と接することなど、小さな行動が社会や世界全体の平和につながると思います。

「平和を実現するには」と問われると多くの人は「戦争をなくす」と答えると思います。しかし、その前に私たち一人ひとりが自身の周りにある「平和」を実感し、大切にすることが必要だと思います。平和な社会の実現のためには、「平和のありがたさ」を心から理解し、それを守るためにできることを考えつづけることが大切だと考えます。私はこれからも、曾祖母が教えてくれたことを心に留め、今ある平和に感謝しながら、私が平和のためにできることを考えて生活していこうと思います。

悲劇

市立高中等部 三年

渡辺 かのん

一九四五年八月六日と九日。広島と長崎に原子爆弾が投下されました。この出来事により、一瞬にして多くの命が奪われ、生き残った人々も放射能による病気や深い心の傷に苦しみ続けました。原爆は、町並

みだけでなく、人々の暮らしや未来、希望までも破壊したのです。

今年九十歳になる私の曾祖母は、当時静岡県で小学六年生でした。原爆の直接的な被害は受けていませんが、戦時中の空襲の恐怖を身をもって体験しています。「空襲警報がなると林の中に逃げて、毎日怯えて過ごしていた。」と語ってくれました。当時は今のように避難場所が整っておらず、警報が鳴るたびに家族とともに林の中に身を潜め、不安な気持ちで空を見上げていたそうです。

また、「今はグラウンドになっている場所も、当時は芋や野菜を育てる畑だった。」とも教えてくれました。食料が不足していた時代、人々は少しでも生き延びるために身近な土地を畑に変えて生活していたのです。そうした話を聞いて、私は戦争が人々の生活を根本から壊してしまうものだとは強く感じました。

戦後、原爆によって焼け野原となった広島と長崎では、人々が互いに助け合いながら、少しずつ復興への道を歩み始めました。しかしその道のりは決して簡単ではなく、多くの犠牲や苦しみが伴いました。とくに、被爆による後遺症や、それによって差別を受けた人々の苦しみは、私達が決して忘れてはならないものです。

曾祖母は、「自分にとって平和とは、家族と一緒にいて、好きなだけ教育を受けること。」と話してくれました。この言葉はとてもシンプルですが、深く心に残ります。家族と過ごせることや、自由に学べることは、今の日常の中では当たり前のように感じてしまうものです。しかし、それらが戦争によって奪われた時、初めてその尊さに気付かされるのだと思います。

だからこそ、私たちは戦争の記憶を風化させず、しっかりと語り継いでいかなければなりません。現在、広島と長崎は「平和の象徴」として世界中から注目されています。それは偶然ではなく、被爆者の証言や慰霊碑に刻まれた言葉、そして平和記念資料館に残された遺品の一つひとつが、「二度と同じ過ちを繰り返してはならない」と強く訴えているからです。

今の日本は平和な時代を迎えています。世界には今もなお戦争や紛争が続いている地域が存在します。私たちは、広島と長崎の教訓を胸に刻み、「平和とは何か」を自分の言葉で語り、行動していく責任があると思います。

平和とは、単に戦争がない状態ではありません。誰もが安心して暮らし、教育や医療を受けられ、お互いを思いやって生きていける社会こそが、本当の平和だと私は思います。曾祖母の言葉からも、その大切さがよく伝わってきます。過去をしっかりと見つめ、未来に向かってどう生きていくのかを考えること。それが、平和を守り続ける第一歩なのではないでしょうか。

平和主義とは？

戸田小中一貫学校 七年

山田桃子

「戦争って、もともとやらなければよかったんじゃない？」

こう考える人も多いのではないのでしょうか。けれど私は、戦争は必要なことだったのかもしれない、戦争がなければ今の世の中にはなっていないかもしれないと考えています。なぜなら、戦争がなければ「平和主義」という考え方や言葉が生まれなかったかもしれないからです。そもそも平和主義とは、戦争や暴力に反対し、争いのない世界を目指す考え方です。この言葉は日本国憲法に明記されました。私は授業でこのことを習ったとき、ふと疑問に思いました。

「大日本帝国憲法のとくに、平和主義を入れておけばよかったのでは？」

と。

しかし調べてみると、大日本帝国憲法が成立したのは明治二十二年で、施行されたのは翌年の二十三年。つまり、日本がまだ戦争に大きく敗れた経験を持たない時代でした。その頃の日本は、イギリスやアメリカ、ロシアと肩を並べたいという欲望のほうが強く、平和の大切さには関心がなかったのです。

やがて第二次世界大戦が始まりました。何も悪いことをしていない

一般の国民や、特攻隊として命を落とした若者たち、未来のある子どもたちまで犠牲になりました。空襲や原爆で町は焼け、広島原爆ドームは今もその悲惨さを伝える建物として残っています。この戦争で、日本では兵士約二百三十万人、国民約八十万、合わせて三百十万人が犠牲になりました。世界全体では兵士三千万人、民間人五千五百万人の命が失われたといわれています。

六年にも及ぶ戦争が終わり、ようやく新しい憲法に「平和主義」が掲げられました。さらに「基本的人権の尊重」や「国民主権」といった理念も定められました。私は最初に「戦争が必要だったかもしれない」と言いましたが、それは戦争を通じて人々がようやく平和の尊さに気づき、憲法にそれを明記したからです。とはいえ、わざわざ命を奪うことまで必要だったとは思いません。

もっと早く海外の戦争の惨状を見て学び、「我が国も強くなりたい」ではなく、「我が国は同じ悲劇を繰り返してはいけない」と考えられていたら……。日本も、もっと早く平和や命の尊さに気づき、人々の権利を守る憲法をつくれたのではないかと私は思います。

戦争は過去に起きた悲惨な出来事です。だからこそ、絶対に忘れてはいけないことです。ずっと語り継ぎ、学び続けていかなければならないと私は強く思います。

百年先も、二百年先も。

世界や人々がいつまでも 平和で幸せになるために

戸田小中一貫学校 八年

長 島 光 希

八月五日の午後十一時三十分。私たち家族は、母の地元である熊本への帰省を終えて、静岡へ車で帰る途中でした。広島市を通ったとき、私は生まれて初めて原爆ドームを見ました。

今まで画像や動画でしか見たことがなかったので、正直あまり大きなイメージは持っていませんでした。けれど実際に目の前で見ると、想像以上に大きく迫力がありました。そのとき、もうすぐ日付が変わり、八月六日の「原爆の日」を迎えることにも気づきました。夜遅くの暗い時間帯でしたが、原爆ドームや近くの広場には多くの人々が集まり、警察が交通整理をしていました。

私はその光景を見て、「原爆投下から八十年がたった今でも、この出来事は決して忘れてはいけない。何の罪もない人々が苦しみ、悲しみを背負うような原爆や戦争は二度と起こしてはいけない」と強く感じました。

静岡に帰ってきた日の夕方、ニュースで広島市の平和記念式典の映像を見ました。たくさんの人々が黙禱し、花を手向けている姿が映っていました。その映像を見ながら、家族と「原爆なんてかわいそうすぎ

て聞きたくもないけれど、これからも語り続けなきゃいけないよね。」と話しました。確かに、原爆や戦争の話はつらく、楽しい気持ちにはなれません。しかし、楽しい日常が原子爆弾一つで壊され、何十万人もの人々が亡くなったという事実を知ることなしに、平和の尊さを実感することはできません。だからこそ、語り継ぐことが大切なのだと思います。

さらに私は、今も続いているロシアとウクライナの戦争のことを思い出しました。すでに三年も戦いが続き、死傷者の数は百万人以上といわれています。そんな現実を考えると、「自分たちに何ができるのだろうか」と悩みます。しかし少なくとも、原爆や戦争の話が怖いからと避けるのではなく、正面から受け止め、「二度と同じ過ちを繰り返してはいけない」と思う人が増えることが第一歩だと思います。

そうしたら思いが広がれば、私たちは日本の中だけでなく、国境を越えて互いに助け合い、平和な世界をつくることができるはずです。そして、みんなが笑顔で幸せに暮らせる未来につながると、私は信じています。

原爆を、見つめ直す。

暁秀中学校 二年

保科心亮

私の曾祖母は、被爆者でした。

私はその事を知ったのは、二年前の夏でした。

みなさんは、原爆について考えたことはありませんか。私も、「その事実」を知るまでは、まったくの他人事と思っていました。

私の母方の曾祖母は、長崎で四人姉妹の二番目に生まれました。生まれてすぐ戦争が始まり、山へ疎開しました。

ある日の朝、生活に必要な物を買うために、曾祖母の母が姉妹の一番上の子と、末っ子連れて、街の方へと出発しました。その日は、「八月九日」でした。

「八月九日」でした。

三人とも、戻ってくることは、ありませんでした。父も、実は徴兵されていましたが、父も、戻ってきませんでした。

このとき、曾祖母はまだ五歳でした。その後、自分の父の実家に引き取られました。

ここまでの話を読んで、みなさんは曾祖母を「原爆から生き残った幸運な人」と思いませんか。

原爆は、曾祖母から「大切なモノ」を奪いました。

引き取られた家で、曾祖母は冷酷な扱いを受けました。「お腹がすい

た」と言えば畑へ投げ出されて手伝うことを強制され、「さみしい」と言えばほうきでたたかれました。

曾祖母は、「愛情」を知らないまま育ち、「愛情を注げない」大人になっただけでした。

曾祖母にも、子どもができました。しかし、子どもを、上手に愛せず、とにかく厳しく育てました。

その子どもは、とにかく親が嫌いになってしまいました。

今でも、私の曾祖母と祖母はとも仲が悪いです。

私は、ここまでの話を、私の母から聞きました。

私は、曾祖母に会ったことがあります。その時、曾祖母はとても元気そうでした。二時間ほど、他愛もない話をしました。しかし、そこ

で「原爆」の話題はありませんでした。私からも、原爆の話をする事ができませんでした。曾祖母が被爆者だということを、その後初めて知りました。

曾祖母は、原爆のことを思い出したくないのではないかと私は思います。

今から八十年前の、一九四五年、八月六日には広島に、八月九日には長崎に、原子爆弾が投下されました。今に至るまで、五十五万八千八百余りの被爆者の方々が亡くなっています。しかし、被害を受けた人はもっといるはずで、被爆によって、がんや白血病になった人もいます。そうでなくても、親や親せき、あるいは大切な人や物を失い、人生を狂わされた人もいます。

にもかかわらず、「原爆を投下したのは正しい」と主張する人もいま

す。

そして今も、戦争は起こっています。

こんな今だからこそ、「原爆」について調べてみませんか。

核をなくすには

暁秀中学校 三年

白井康惺

今から八十年前、広島と長崎に原子爆弾が落とされ、太平洋戦争が終結しました。このとき、多くの命が失われ、あるいは一生の傷を負った人も多くいました。戦後日本は世界唯一の被爆国として核廃絶に向けた運動を始めました。非核三原則の確立、原水爆禁止世界大会の開催、平和記念式典の各国への招待など世界に向けて核兵器を使つてはいけない、と働きかけてきました。それでもなお核の脅威はなくなつていません。世界各地で紛争が起こり、核の使用をちらつかせている国があるのです。でも私は核とは何なのか、なぜそこまで核を使つてはいけないのか、知りません。私は改めて核について考え直してみようと思いました。

原子爆弾、原爆とは、ウランやプルトニウムといった元素に中性子を衝突させたときに起こる核分裂のエネルギーを兵器に利用したものです。一度使えば全てを破壊し、相手国に大きなダメージを与えます。

これに加えて、爆発と同時に大量の放射線を放出し、人々に原爆症をもたらします。原爆症の例としてはガンや白血病などが挙げられ、被爆から発症まで数十年かかったケースもあります。また被爆者だからというだけで差別を受け、苦しんだ人々もいます。兵器としては他にないほど強力ですが、それ故に相手を長期間に渡って苦しめることにもなります。現在九カ国が核を保有していますが、アメリカ以外は使用したことはありません。

なぜ核の保有が続けられるのでしょうか。一つは保有しているだけで大きな力があるからです。核保有国と戦争を起こせば、核を使われるかもしれない可能性があります。それだけで相手国にとって脅威であり、戦争の抑止力になります。この脅威は外交を有利に進めるための手段としても使われています。もう一つは今更手放すことが難しいからです。核保有国が核を手放せば、他の保有国に目をつけられるかもしれません。またそれ以前に、これまで受けていた恩恵もなくなることもなります。互いに持ち続けているから、核の保有は続けられているのです。

ではどうすれば核をなくすことができるのでしょうか。私は二つ方法があると思います。一つ目は皆で一斉に核を手放すことです。他国が持っているから自国も持つていなくては危ない、というのならどの国も持つていないようにすれば良いのです。国同士が協議して、全ての核保有国が核を捨てることになれば、この状態は解消されます。しかし、現状これは非常に難しいです。最盛期に比べ、世界の核弾頭の数は減っていますが、ここ三十年で核廃絶を決めた保有国はありません。

ん。また、一度手放しても作り直すことができってしまうのも問題です。そこで二つ目の方法は核への対抗策です。監視システムによる早期感知、迎撃、あるいは被害を最小限に抑えるシエルターや放射線処理技術などが挙げられます。これらが確立されれば、核は戦争において有効打にはならず、使用されるリスクが減るのではないのでしょうか。しかしこれも財政的な問題があります。時間もよりかかるので、一つ目の方法よりも良いとは言えません。

よって私は皆で一斉に核を手放すことが最善だと考えます。そのためには、核の危険性を核保有国にしっかりと伝え、理解してもらうことが大切です。今年の広島平和記念式典には核保有国のイギリス、フランス、アメリカ、インド、イスラエルも参列しました。核廃絶を訴えかける機会は十分にあります。日本だけでなく、他の国とも協力して、これまで以上に働きかけていくべきだと思います。どこか一カ国が放棄すればそこから広がっていくかもしれません。この先、日本が核廃絶へ大きく踏み出したとき、自分も日本国民としての知識が必要だと思えます。実際に広島や長崎を訪れて、より自分の理解も深めてみたいのです。